強過ぎる彼女、弱過ぎる僕。

空々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
強過ぎる彼女、弱過ぎる僕。

【Ｎコード】
Ｎ３１２６Ｌ

【作者名】
空々

【あらすじ】
僕の彼女は史上最強なんだ。
誰も敵わない。
でも…かわいい。
そんな彼女と僕のお話。
愛あり、笑いあり、涙あり、そしてたまにはあるかな？　エロもあり！！

第一話　花火ちゃん

街の不良たちが山のようなに積み重なる。

呻く者。

血を口から吐く者。

母親の名前を叫ぶ者。

気絶している者。

恐怖の余りに放心状態の者。

不良たちは完全な敗者だった。

戦意喪失は確実。

けど、彼女は戦闘態勢を崩さず不良たちを威嚇し続けた。

「・・・・・・・・・・・・花火ちゃん？」

僕は遠く離れた電柱の陰から震え声で呼び掛ける。

「ん？」

振り返る花火ちゃん。

可愛い。

両拳にベットリと付着した血さえ、無ければ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「もう帰らない？」
「だめ～。まだ生きてるから」

殺すのか！？
罪を犯す気！？

頭をブンブンと振り、電柱の陰から出て行く。

「うわぁ」

辺り一面、地獄絵図が広がっている。
電柱の陰からチラチラと見ていたが、直視すると足が竦みそうになった。

僕は恐る恐る彼女に近付いてく。

笑顔の彼女。
でも背景は恐ろしい。

「大地くん？」
「なに？　花火ちゃん？」
「そこの人、生きてるからお願い出来る？」
「え？」

横を見る。
呻いているリーゼントの男がいた。

いや、何ていうか、足が曲がっていけない方に・・・・・・・・・・。
いや、僕は何も見ていない。
見ていないぞ。

「花火ちゃん、もう帰ろうよ。ここに居たらだめだよ」
「え～でも」

クネクネと体をグネらす彼女。
だだをこねているみたいで、かわいいけど・・・・・・・・・マジ警察、来たら不味いから。

僕は無理矢理、花火ちゃんの手を掴んだ。

「あっ大地くん」

ほほを染める彼女。
マジ、かわいいよ～死んでも良い。
でも、場所が悪いよ～。
かわいいのは横に置いて、腕を引っ張る。
けど・・・・・・・・・・・・。
そう彼女は見た目はすごく小さく、細いけど、めっちゃ力があるから僕の力では、ビクともしません。
はい。
情けないです。
弱過ぎる僕です。

「行こうよ」
「うん。いいよ行こう。たぶん、ここに居る人たち、大半の将来は下半身麻痺だから死んでるも同然だもんね」

さらりと恐ろしいことを言う。
いやいや、マジ怖いから。

僕は心底、恐怖していると、彼女から手を繋いでくれた。
テレながら。
すると、彼女のドキドキが僕にも伝わったのか自然と恐怖は無くなり、落ち着いた。
女の子の肌って、なんでこんなに柔らかくて優しいんだろう？
僕はトロけそうだ。
ぬるま湯に入ってる心境だ。

そんな心境を知らない彼女は空を見上げて、何かを考えていた。

なんだろう？
この夕日を見て、ロマンティックになってる？
この場合はキスかも・・・・・・・・・・・？
いや、待て。軽はずみな想像は駄目だ。

「大地くん」
「なんだい？」
「うん・・・・・・・・・」

テレながら、下を向く。
夕日の加減で頬を赤らめているようにも見えた。
これは！？
来るか？
彼女と付き合い始めて半年、いろいろとあったけど、遂にキス。
もうあれこれ、無視してエンディングみたいな感じだ。
小説だったら、第一話で終わり的な！？
でも、関係ない。これは僕の物語なんだ！

と、妄想の世界にダイブしている間に、繋がれていた手が離れて彼女は先に歩いて行っていた。

あれれ？
どういうことだ？

「大地くん～おなかすいたねぇ」

おなか？
だよね。
うん、あんなに暴れたらおなかも減るよ。
うん、そうだ、そうだ。
まだ早いよね・・・・・・・・・・・キスは。
僕は落ち込みながら、彼女のところまで走った。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・To Be Continued.

第二話　たぬき

ある日、僕は彼女に呼び出された。

最近、彼女がハマっているモノがあるらしく、それを見せたくてたまらないらしい。
僕的には意外だった。
あの花火ちゃんがハマるなんて想像も出来ないからだ。
一体なんだろう？
意外にもたぬきの人形とかだったら、僕は彼女の愛くるしさとたぬきの人形をチョイスするハイセンスに我を忘れて、抱きしめそうだ。
いや、もう止まらない情熱で行くところまで行くかも？

男子高校生らしい青春の妄想に耽っていると、待ち合わせの場所に彼女がやって来た。

遠くの方から走ってくる。

何か持っている？　いや引きずって・・・・・・・・・・・・・。

え？

・・・・・・・・・・・・うそ！？

嫌だ。

ほんとうに待って！

彼女が引き摺っているのは、男性だった。

例によって、男性は血だらけだ。
しかも、ヤクザみたいな紫のジャケットを着ている。

もしかして、ハマってることって、男性をボコにして引き摺り回すことなんじゃ・・・・・・・・・。

よーし冷静になれ、大地！
ここは冷静になるんだ。
彼女が強過ぎるからって、毎回、誰かを血祭りにしてたら、ネタのない使い回しの小説だ。
売り上げも低迷。
出版不況も改善しない。
そう違う要素で考えないと駄目だ。

えっと、あれは・・・・・・・・・血だらけの人を助けたんだ！！
花火ちゃんは力がめっちゃある！
だから、助けた！
引き摺るのは・・・・・・・・・そうだ！
身長が低いから仕方ないんだ！
うん、そうだ。そうに違いない！

神に願うように思っていると彼女がやって来た。

「ごめんね、遅れて。この人がね。ふうぞくっていうの？　わかんないけど、なんかね、肌で男の人に抱き付くだけで、十万円もくれるっていうの。わたし、意味がわからないから、知らん振りしようと思ったんだけど・・・・・・・・・」
「けど？」

大体は予想はつくが聞いてみる。

「めんどうだから、ボコっちゃった！　てへ」
「あっははは。そうなんだ。さすが花火ちゃんだ」
あ～結局はお約束通りなんだ。
ん？　でも何で引き摺ってきたんだ？
「ねぇ花火ちゃん、それどうするの？」
「大地くんどうしたい？　死体遺棄する？　刻んで細かくして、いろんな所のゴミ箱に入れる？　それかね燃やそっか？　でね、その横で花火しようよ。花火と花火みたいな」
めっちゃめっちゃ、良いこと思い付いた的なノリで話す彼女。
最後の「花火と花火みたいな」の所はもう可愛過ぎて、永久保存したい・・・・・・・・・・・・けど、待とう。取り敢えず、待とう。
萌えるのはいつでも出来る。
問題はこのヤクザみたいな人は死んでいるのか、が問題だ。

「この人、死んでるの？」
「ううん。まだ生きてるよ。やっぱり最後は彼氏の大地くんにトドメをって思ってね、持って来たの」
大変、嬉しそうな彼女です。
いや～本当に良い子だ～。
っておい！
僕は間違っても人は殺めないし、死体遺棄もしない！

「花火ちゃん、ちょっと聞いて、この人をここに置いて行こう」
「なんで？　他の人がトドメを刺すかもよ？」

心配そうに言う。
うん、それは困る・・・・・・ってことはないんだけど。
・・・・・・・・よし分かった。
手当てだ。
ここは手当てをしよう。
彼女の失態は彼氏が何とかする。これは常識だ。

「わかったよ」
「トドメ、刺す？」
「違うよ。手当てしよう」
「手当て？」

意味が分からないという顔を向けてくる。

「そうだよ。このまま放置はかわいそうだから」

僕はそう言うといつも常備している絆創膏を取り出して、男の頬に張る。
う～ん、明らかに僕の持っている絆創膏じゃあ足りない。
包帯とか・・・・・・・・あれば？

「ん？　これは？」

彼女は包帯を渡してきた。こちらを見ないで、早く取ってみたいなツンデレ感を出しながら。

「花火ちゃん、ありがとう」

「違うもん、たまたま、胸に巻いてただけだもん！」

はい？

何ですと？

胸に巻いていた？　ってことはサラシ。

ってことは・・・・・・・・・！！！！！

僕の目の前が真っ赤に染まる。

鼻血だ。

だって、だって、だって！！！

彼女がこんなに・・・・・・・・・。

あ～言えない。

言えない。あんな小柄で・・・・・・・・・細くて・・・・・・・・・・・・・・・でも胸が・・・・・・・・・・・・・。

駄目だ。

鼻血が止まらない。

「どうしたの？　大地くん？　あれ？　鼻血？　あ！？　もしかして！」

次の瞬間、花火ちゃんは空中を舞った。

そして……横渡る男に。

見事なムーンサルトプレスだ。

いつ、そんな大技を会得したんだ！！

って違う！

男は……

うん。死んだ。もう駄目だ。

ここは放置しよう。

「花火ちゃん、もう行こう」

「うん、行く」

「ってか、なんでムーンサルトプレスを？」
「だってね、大地くんが鼻血を噴射させたからあの人に攻撃されたって思ったの！　だからここは大技でトドメをって」
「そうなんだ」

言えない。
花火ちゃんの服越しに見えるあのシルエットで、僕の血が暴れだしたなんて…。

すまない。
名も知らぬ男。
ごめんなさい。
僕の彼女が凶暴で。

「行こう大地くん」
「うん」

そうだよ。
今日はデートなんだ。
死んだ男は忘れよう。
だって……僕の彼女は巨乳だから。
ゴホン。
不味い不味い。

さて、花火ちゃんは僕を何処に連れて行くんだろうか？

しばらく、彼女に連れられて行く。
そして、着いたのは大きなたぬきが立っているうどん屋だった。

もしかして、花火ちゃんが最近、ハマってるのって！

たぬき！？

僕が花火ちゃんを待っている間に妄想したたぬきだ！
これは僕らがシンクロしていることを証明してるんじゃあ！

やばい。
こんな小さなことが嬉しい。
いや、こんな小さなことが人間にとっては大事なんだ。
僕らは小さい奇跡を感じながら……あれ？
花火ちゃん？

僕が感動している間に、彼女はファイティングポーズをとっていた。

何を？

うそ～～～！！

黄金の右手が置物たぬきに入る。
すると、たぬきの顔面が粉砕して、大きな穴が開いた。

「たぬきの化け物」

ぼそっと彼女はつぶやき、もう一撃を入れようとした。

「花火ちゃん、待って待って！！　器物損壊罪になるよ！」

叫ぶように言う。

「でも……倒さないとお店に…」

「いや、入れるから。それは門番とかじゃぁないよ」
「ほんとう？　だったら、良いや。入ろう大地くん」
「……うん」

安堵して、お店に入る。
というか、たぬきを壊して、入るお店は既に無銭飲食をしているようだ。
僕は嫌な汗を流しながら、席に付く。

「大地くん、なににする？　私はね、たぬきうどんだよ」
「たぬきうどん？　好きなの？」
「最近、ハマってるんだよ」

そっちか～～～。
シンクロしてるけど、そっちですか？

まぁかわいいから良いけど。

そして僕もたぬきうどんを食べました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・To Be Continued.

第三話　風邪

悲しいことに僕は身体が弱い。
月に二度ほど、体調を壊して学校を休む。
情けない。
でも、悪いことばかりではない。
彼女が見舞いに来てくれるんだ。
これは大変な優越感だ。
なので言いたい。

全国の彼女無しの皆さん。
全国の未婚者の男性たち。

本当にすみまてぃ～ん～。

いや～本当に幸せだ。
熱も幸せ過ぎて、高い。

さて、今日は母さんも妹も居ないから……。

ゴホン。
大人になりますか！

……いや、待て！
それは行き過ぎか！
今回は見舞いだ。
その、えっと、エッチとか～そういうのは無しだ。
キスとかも……これはアリかもしれないけど、流れがあるからなぁ～。

よし。
ここはその時になって慌てないためにリハーサルをしよう。
まず、花火ちゃんが家のチャイムを押す。
リハーサル「ピーポーン」
この時、僕は急ぐ訳にはいかない。
あれ？　死んでる？　みたいな心配をさせないと駄目だ。
そして、もう一度。
リハーサル「ピーポーン」
ここで、僕がインターホーンの受話器を取る。
リハーサルの僕「はっはい？」
弱弱しい僕の声に彼女は、慌てて言う。
リハーサルの彼女「だいじょうぶ？　大地くん？」
リハーサルの僕「大丈夫だよ。今日はどうしたの？」
白々しく言う。
リハーサルの彼女「お見舞いに来たんだ。家の中、入れるかな？」
リハーサルの僕「風邪、うつるから今日はだめだよ」
リハーサルの彼女「だいじょぶだよ。大地くんの風邪、移ったらうれしいもん」

うむ。
最強のリハーサルだ。

そして彼女が家の中に入ってからは、もう有り得ないの連続だ。
まずは、彼女の手料理が出てくる。
花火ちゃんは結構、天然が入っているからガッツリ、料理を作るはず。
揚げ物。
ステーキ。
寿司。
スパム。
カエル。

いや……カエルはないか。
まあ行き過ぎても生レバーかな？

そして、デザートはケーキ。
もちろん、僕の好きなショートケーキだ。

お腹がいっぱいになったら、僕の好きなアニメのＤＶＤを観る。
たぶん、ここで沈黙。
二人はベットの上でアニメを観ているから、自然と向かい合い。
……合体！！！
的な！
最高です！　そうなれば、熱など引きます。

さあ～花火ちゃん、おいで～

でも…。

はい。来なかったです。
その日の夜は熱が悪化しました。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第四話　壁

今日は不覚にも遅刻をしてしまった。
なので走っている僕。

もちろん全速力である。
けど、全速力は二秒ほどで終わってしまう。
貧弱な身体だから仕方ないけど、情けない。

息を切らしていると前に彼女と行ったうどん屋の亭主がお店を開けているところだった。
後になってわかった話だが、このうどん屋は僕の家から近距離で、たぬきの置物を何者かに破壊されたことは町内では噂になっている。で、被害を受けたうどん屋の亭主は余り、怒っていないらしいが、一人息子は怒り狂い、犯人を捕まえると躍起になっているらしい。

僕は申し訳ない気持ちから頭を下げて店の前を通り抜ける。
その際にたぬきの置物をチラリと見ると大きな絆創膏で破壊された箇所を隠していた。
遠目から見れば、マスコットに見えなくも無い。
まぁ不気味ではあるけど。

サッと通り過ぎた筈だったが、運が悪いのか、運命なのか、僕は背後の視線に気付いてしまった。
明らかにうどん屋の亭主に見られている。
そして、一人息子も出てきたのか、話し声が聞こえ始めた。

「あいつじゃねぇか親父？」

「ありゃあ違うだろ？」
「なんでだよー」
「どう見ても、不登校児だ。背中に覇気がねぇ。んで、根も弱そう。いやもう枯れてらぁ」
「そうか。最近のガキは死んでるだな」

えっと聞こえてますよ～。
覇気がねぇって、覇気って何ですか？　弱い奴は泡を吹いたり、能力を持っていてもダメージを喰らう奴ですか？
ってか枯れてるって！？

僕、そんな風に映ってるんだ。
ショックだ。
本当の不登校児になっちゃうよ。

はぁ～弱過ぎるなぁ僕は。

落ち込みながら、学校に到着すると丁度、休憩時間だった。

「おはよう」

と、一声だけあいさつをする。
すると、僕の存在に気付いた男子が寄ってくる。

「大地、彼女を紹介しろよ」
「しろよ」
「頼むよ」
「お願いだ」

地味な友人ＡＢＣＤが唐突に言って来る。

だけど、いつものことだから驚かない。
僕の彼女は人気者だから、当たり前なんだ。
でも紹介をするのは無理だ。
ここは恥ずかしいが言おう。
花火ちゃんは僕のモノなんだ。

「ごめん、無理だよ」
「何？」
「聞こえませんけど」
「コラ」
「頼むぜ」

地味な友人改め、弱者に強い友人ＡＢＣＤが言い放つ。
ってか、同じ学校で一つ年下なんだから、会いに行けば良いじゃないか！

「紹介とかしなくても、会いに行けば？」
「行ける訳ないだろ？」
「そうだ」
「行けないよ」
「そうだそうだ」

情けない奴らめ。
僕は「無理だよ」の一点張りで彼らを回避して、席に座る。
けど、静寂はやって来ない。
次は女子だ。
けど、答えは変わらない。

休憩時間が終わり、授業が始まる。
一応、先生に遅刻したことを怒られる。

で、なんだかんだで、学校が終わる。

小説だったら、罵声が飛びそうな展開だけど、何も無いのが一番だ。
いきなり、ヤンキーに囲まれるとかは有り得無いし、いきなり魔法バトルも無い。
乗り越えないといけない壁も、ライバルもまだ出現していない。

けど、これはあっても良いんじゃないかなぁ～って思う。

校門のところで生徒たちが下校する中、一人だけ淋しげに彼氏を待つ花火ちゃん。
すごく絵になる。
手持ち無沙汰でカバンをゆらゆらと揺らせて、遊んでいる。
よし、走ろう。
そして言うんだ。

一緒に帰ろうって。
彼女もその言葉を待っているんだから。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第五話　伝説の人

久々にアルバムを見ている。
中学生の時のやつだ。

はぁ～。

なんで僕、いつも顔、ボコボコなんだ？
ってか影、薄いな。
友達って……。
うん。居なかったです。

あの頃はずっと一人だったな。
弁当なんて、一人で食べてたし。

けど、花火ちゃんの存在を知ってから僕は変わった。
思い出すなぁ～。まだ花火ちゃんを知らなくて、花火ちゃんのことを「鬼」って呼んでたことを。
そして、僕は思い出に耽た。

中学生の頃、僕は毎日、イジメられていた。

「おい。大地、コンビニ行って来いよ」

同い年の不良Ａに言われる。
僕は断ることも出来ずに、

「何を買ってくる？」

と、情けなく聞くことしか出来なかった。

「そうだな～おにぎりとエロ本を買って、温めて下さいって言え」

「……無理だよ」

「あん？　出来ないのか？　そうだなぁ～じゃあカップ麺を温めて下さいって言え！」

こいつ、なんでそんなに温めて下さいが好きなんだ？

ってか、そんなの出来る訳ないじゃないか！

そんなことが出来るなら、僕の冷え切った心を温めて欲しいよ！

明らかに拒否反応を示すと、不良もそれに分かったのか、僕はボコボコにされ、

「早く行け」

と、蹴られた。

泣く泣く、コンビニに行くとそこには、この辺りで一番、悪い不良たちが集まっていた。

最悪だ。

なんで、こんなときに。

そいつ等はコンビニの入り口を完全に塞いで、ウンチ座りで僕は見ていた。

僕は諦めて、違うコンビニに行こうと考えた時、そこに同じ中学の制服を着た小柄な女子がコンビニに入ろうとしていた。

咄嗟に僕はその女子の腕を掴んだ。

「駄目だよ。危ないから」
良く見ると下級生だと分かった。
だから、ここは先輩らしく助けようと思ったのだ。

「ここは止めた方がいいよ」
「離してよ。私、立ち読みがしたいんだ」
「あいつ等、見えないの？」
「見えてるよ。でも、関係ないもん」

次の瞬間、掴んだ手が外され、下級生は不良たちの前に立った。

「のいてよ」
「無理だねぇ～ガキは家に帰りな」
「嫌だ」

僕は絶対にヤラれると思い、目をつぶった。
けど、彼女は退かない彼らを踏み付けた。
完全に重量は彼女の方が軽い筈なのに、彼らはマンモスに踏まれたみたいにダメージを受けていた。
だが、全員を仕留めるには、踏み付けは有効的ではなく、数名の不良が彼女に殴り掛かろうとする。
でも、彼女は読んでいたようにシャイニング・ウィザードを繰り出す。
スカートを履いているのに、女子がやる技ではない。
相手にパンツを暴露するようなもんだ。

そして不良たちは全て倒し、彼女だけがその場に立っていた。けど、彼女はそれでも気が治まらないのか、数人を同時に引っ張り、道路に投げ出した。

しかも、車がブンブン通る道に。
思わず僕は「鬼！」と叫んでしまった。
彼女の耳に確実に僕の言葉は聞こえた筈なのに、無視してコンビニに入っていた。
そして、前言通りに立ち読みを開始した。
僕も遅れながらもコンビニ入り、彼女の読んでいるモノを盗み見した。

はい？
地図？
なんでだろう？

熱心に地図を読んでいた。
しかも、ここら辺の地図である。

不思議に思いながら、不良Ａに言われた通りにカップ麺を買い、こっそりと彼女の読んでいた地図も買った。
地図の値段を知らない僕は会計の時、死ぬほど驚いたのは言うまでも無かった。

不良Ａの所に帰って、カップ麺を渡すと無意味に蹴られた。
理由は湯を入れて来いということだった。
そんなの知らない僕は、またコンビニに行くのも面倒なので、話題を提供することにした。
もちろん、先ほどの下級生の彼女の話である。

脚色して話していくと不良Ａの顔色が変わった。
そして一言、こう言った。

「伝説の人」

と、そのときは意味が分からなかったが、その意味が分かるのはまた当分、先の話だった。

……To Be Continued.

第六話　お化け屋敷

遊園地といえば、やはり彼女彼氏の愛を育むスポットと思う。
観覧車なんて逃げ場の無い密室。間違いが起こっても、間違いを犯しても、誰も僕を止める者はいない。
あと、ジョットコースター。
あれは興奮状態、もしくは脱力状態にしてしまう。
状態はどっちに転んでも、彼氏の僕がしっかりしていれば、彼女はメロメロ。
共通の快楽は恋人たちに深い絆を生じさせる。

ってことで、今日は知人から貰った無料のペアチケットで遊園地に来ている。
花火ちゃんと遊園地なんて初めだ。
緊張のあまりに動悸が激しい。
彼女はどうだろう……？
横目で見てみる。

「鉄が多いねぇ」

ジョットコースターを見上げて言う。
確かに骨組みは鉄だろうけど……。
うん。いいけど。

それより、遊園地は彼氏がリードするのが基本。
乗り物の待ち時間で会話が続かなければ、つまらない男の烙印を押される。
乗り物のチョイスも慎重に選ばないとセンスが問われる。
難しい。

難事件だ。

でも考え過ぎもアウトだ。
リードすることに重点を置くと彼女のきめ細かいケアが出来なくなる。
それはそれでアウトなんだ。

だけどだ。
僕はここで負け犬になることは拒否する。
完璧にこのイベントを乗り越えるぞ。

「大地くん、あれは？」

意気込んでいると質問が飛んできた。
よし、この質問を上手く答えるぞ。
最初が肝心だからね。
で、花火ちゃんは何を見ているんだ？
僕も彼女が見る方向を見た。

「あれ？」

指を指す。

「違うあれだよ」
「えっあれ？」
「うん。なにかなぁ～って」
「あれは……」

確かに、小さい頃は興味を持ったことはあるけど、遊園地に来てあ

れを聞かれるとは。
「たぶんだよ。あれは操作する小屋だよ」
「操作？　あの風車を操作するの？」
あれ？
もしかして、観覧車を知らないの花火ちゃん？
だから、観覧車の下にある操作小屋みたいなモノに興味を！？
いや、有り得ない。
花火ちゃんはもう高校一年生だ。
遊園地の観覧車を知らない訳は無い。

けど、その懸念は当たった。
メリーゴーランドを見ても「綺麗なパレードだね」と言ってきた。
コーヒーコップは「いつ紅茶を入れるの？　あの人たちは工事の人？」と言って来る。
駄目だ。
花火ちゃんは違う意味で遊園地を楽しんでいるよ。

あ～僕のお化け屋敷で抱き付かれて、ドサクサに紛れておっぱいを触る作戦と、観覧車でキス作戦が見事に崩れ去った。

僕は完全に落ち込んでいた。
けど、チャンスが舞い込んできたんだ。
彼女がお化け屋敷に興味を示した。

「入る？」
「良いの？」
「良いよ。けど怖いかもよ？」

意地悪をして脅してみる。

「大丈夫だよ。大地くんは私が守るから、こんなこともあろうかと昨日、プロレスの技を覚えてきたから」

そう言って笑う。

うん。

本当にかわいいでございます。

でもね。

お化け屋敷で大暴れは避けたい。

本当に壊したり、人に危害を加えたら、捕まるから。

だけど、楽しそうな花火ちゃんは本当に愛らしい。

そして、僕は間違いを犯す。

愛する者のために。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第七話　バイト

「いっらしゃいませ～」
「もっと声を出してね、大地君！」
「分かりました店長」

バイトというのは疲れる。
けど、お金が要る。
少ない小遣いでは全然、足りないのだ。

そう、遊園地の事件だ。
結局、お化け屋敷に入った僕と花火ちゃん。

はい。
暴れました。
花火ちゃん、大暴れです。
止めれません。
壁は穴だらけに。
脅かすお化けさんたちは返り討ち。
仕掛けのお化けちゃんも残骸に。

もうドサクサに紛れて、おっぱいを触るなんて無理でした。

ネタの無い小説じゃあないんだから、毎回の大暴れは回避したかったけど、お粗末な結末になりました。

と、後悔しても仕方が無いから、やってしまったことのケジメはつけようと思う。
遊園地側は別に良いと言っていたけど、お化け屋敷を全壊させたの

は彼女なのだから弁償をしようと考え、バイトを始めた。
取り敢えず、十万円を遊園地側に渡すことにした。
一応、男だからこれは当たり前なんだ。
それに……花火ちゃんを愛しているし。

臭い台詞はここまでにして、バイトに集中だ。

コンビニのバイトだけど、バイト経験の無い僕には全てが恐怖だ。
ほら、男のお客さんが入ってきた。

「いらしゃいませ～」

大きな声で言う。
けど、お客さんの反応は無反応。
ってか睨まないで。

そのお客さんは店内をゆっくり回り、雑誌を手に僕のところに来た。
お会計だな。
えっとこの機会でピッとすればオッケーだからっと……

「ピッ」
「２５０円です」

愛想良く、言ったつもりだけど、そのお客さんは無愛想。
無愛想だけど、こっちは下手に出ないといけない。ここ早く、片付けよう。

お金を素早く受け取って、商品を袋に入れて、

「ありがとうございました」

と、言う。
ってか、このお客さん、何も言わないで行くんだ。
でも、コンビニに来て、店員に愛想を振りまくお客さんは居ないよね。
あ～辛いなバイト。
こんな時に花火ちゃんが居てくれたらなぁ～
でもこんな時に限って、花火ちゃんは来ずに僕の天敵がやってくる。

不良ではない。
ヤクザでもない。
同級生でもない。
もちろん、花火ちゃんの親でもない。

僕の妹・陸（りく）が来た。

悪夢だ。
悪い夢だ。
こいつはこいつだけは出入り禁止にしてくれ。
頼む。

バイト一日目でクビは嫌だ。
こいつを回避するために家から遠いコンビニを選んだのに、何故、来る？
嫌がらせか！

本当に最悪だ。
でも考えている暇はない。
ここは他人のフリだ。

「ん？　あれ？　もしかして？　え？　うそ？　お兄ちゃん？」
「……いっらしゃいませ～」

僕は店員だ。
このコンビニの店員。
こいつはお客さん。
時よいつもより早く進め～～。

「あれ？」

僕の願いが通じたのか、陸はお店を出て行った。
そうだ。
お前は来るな。
中学三年生は受験勉強に勤しめ！

けど、そんなに甘くなかった。

陸は戻ってきたのだ。
自転車に乗って。

うそだ～。
マジやめて～。
ほんとう止めて～。

何気にドリフトなんかして、店の中を回りだす。
店内にお客さんが他にいないけど、棚の商品に当り、落としまくっている。

僕の妹は、本当にアホだ。
このまま、放置して、コンビニに常備している防犯用のカラーボー

ルを投げてやろうか？
「陸、やめてくれよ～」
「無理～」
「奥に店長が居るんだぞ」
「店長がなんだ～お兄ちゃんの妹だぞ」
「クビになるから」
「なれ～」

こいつ。
何を考えているんだ。
そこまで僕が嫌いか！？
って考えている間に勝手にジュースを飲んでるし。
防犯カメラに映っているから少年院送りだな。
さらばだ陸。

「こら～何をしている！　大地君も捕まえなさい」

奥に居た店長が飛び出してきて、陸を追いかける。
僕も形だけは追いかけるが二人で陸を捕まえるのは無理だ。
あいつは運動能力だけなら、オリンピック選手に匹敵する。本人にやる気が無いから何も出来ない駄目な中学生だけど、こんな時だけはあいつは自分の能力を最大限に使い、逃げるだろう。

ほら、逃げた。

「さらばだ～お兄ちゃん」

颯爽と逃げる陸。
僕を兄と言いながら。

「大地君、どういうことかな？」
「いえ、知りません」
「お兄ちゃんと言われていなかったかい？」
「知りません。あんな意味不明な女子は」
「まぁいい、防犯カメラに顔が映っているから直ぐに捕まるだろう」
「……そうですね」

けど、防犯カメラには陸の顔は映っていなかった。
そもそも、陸は頭が非常に良い。
考えも無しにコンビニに自転車で突撃するアホではない。
上手いこと、カメラを回避して顔を映らないようにするのは動作も無いだろう。

後日、このコンビニの映像はテレビで流れ、全国のお茶の間の話題を独占した。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第八話　お弁当

昨日の夜、花火ちゃんから電話が来た。
内容はこうだ。
「明日、おべんとうをもっていくから、一緒にたべよう」
見たか！
どうだ！
もう学園恋愛物の定番だ！
もちろん、想像は出来る。
この場合は玉子焼きが凄く焦げているパターン。
もしくは、食えたもんじゃねぇパターン。
でも僕が頑張って食うパターン。

これに尽きる。
他は無い。
あれば、応募したい。
大地宛までドシドシ送っていただきたい！
な～んてね。
もう定番でも常連でも、ワンパターンでも良い。
誹謗中傷でもなんでも構わない。
僕は花火ちゃんのお弁当を食す。
あ～幸せだ。
もし、僕が外人だったら、ノリはサウンド・オブ・ミュージックだ。

歌いだしたい気分。

僕はルンルンの気分で、時間が過ぎるのを待っていた。
そして、昼食の時間だ。
僕は待ち合わせの校門に向かった。
お弁当を食べるなら、普通は屋上だろうけど、一般的に屋上は開放されていない。
自殺したり、タバコを吸う場所を提供するようなもんだからだ。
だから僕らは校門でお弁当だ。
ここは日当たりも良く、何気に座る場所もあるので、他の生徒たちもたまに見掛ける。
運良く、今日は居ないから校門は僕らのもんだ。

ってか、校門って学校の門だけど、意味が違う肛門を連想してしまい、肛門で食事って考えそうだから、もう校門って言葉は封印しよう。
そうしないと花火ちゃんのお弁当が不味くなる。

ふぅ。日本語はこういうのが、嫌だよ。
なんて、考えていると花火ちゃんが走ってきた。
僕の天使だ。

あれ？
手ぶら？
弁当は？

「大地くん、ごめんなさい」
「どうしたの？」

泣きそうだ。

わかった。
作るの忘れたんだ。
可愛いな。
よし。作るのを忘れたなんて彼女の口から言わすのは男じゃあない。
ここは僕から言おう。

「もしかして、お弁当、忘れちゃったの？」

紳士だ。
まさに男の中の男。

「ちっ違うの！」
「えっ。じゃあどうしたの？」
「食べちゃった！　二つ」

流石だ。
僕の想像を軽く超える。

「いいよ。じゃさ二人で購買部に行こう」
「うん。でもね、そろそろ来るから待ってね？」
「なにが？」
「来るから、待とうよ」
「うっうん」

分からないまま、僕らは座って、何かを待った。
すると数分後、バイクの音がして、校門の外で止まった。
なんだ？
出前？

「来たよ」

「花火ちゃん、出前を取ったの？」
「うん。そうだよ」

ってか、家の近くのうどん屋さんだ。
一人息子の方が出前担当なんだ。
けど、これって気まずくないか？
この人って、たぬきの置物を壊した犯人を捜している筈じゃ……。

「ねぇさん、持ってきました。たぬきうどん二つです。あとオマケでカツ丼も持ってきました」
「あい、ごくろうさま。おいくらですか？」
「いや、ねぇさんからお金を取るわけには……」
「何を言ってるんですか？　いくらです？」
「いえ、お金は…」

なんだ、この師弟のような遣り取り。
しかも、ヤンキー上がりみたいな人が花火ちゃんのことをねぇさん？
どういうこと？
ってか花火ちゃんの拳が強く握られていくのが、分かる。
花火ちゃん、結構、短気なんだね。

「いくら？」
「あっでは、１００円で良いっす」
「はい。１００万円」
「丁度、いただきます。どんぶりは割るなり、破壊するなり、好きにしてください。それが手間なら、校門の外に置いてて下さい」
「あ～い」

花火ちゃん……いろんな意味で凄い。

普通、こんだけ頼んで、１００円は有り得ないし。
１００円を出すときに１００万円とか大阪のお婆ちゃんでももう言わないよ。
しかもあの人、なんであんなにビビってるんだ？
何かあったのかな？

「花火ちゃん？　知り合いなの？」
「違うよ。常連さんだからだよ」
「へ～そうなんだ」
「それより、食べよ食べよ。学校で出前とかなんか良いね。そうだ。食べ終わったら、どんぶり、二人で割ろうね」
「あ～うん」

曖昧な返事をする。
常連さんにあそこまで低姿勢なのかも、疑わしい。
何かあるのは、確実だな。
でも今は食べよう。

「おいしいね」
「うん。おいしいね。今度はお弁当、持ってくるかね」
「うん、期待してるよ」
「でも、コンビニのお弁当なんだけどね」
「……え？」
「どうしたの？」
「ううん。何もないよ」

コンビニのお弁当なんだ。
てっきり、手作り弁当と思ったよ。
確かにお弁当を持っていくから一緒に食べようの中に手作りっていうキーワードは無かったけど…。

残念だ。
花火ちゃんのお弁当、食べたかったよ。
そして僕らの昼食は終わった。
もちろん、どんぶりは洗って校門の外に出しました。
けど、僕はこの時、知らなかった。
このほのぼのライフが崩れることを。
そして伝説が動き始めることを。
……To Be Continued.

第九話　怪我

事件は突然、起こった。

「え～昨日、うちの学校の生徒が何者かに襲われ、病院に運ばれた～お前たちも注意しろよ」

ざわつく教室内。
僕も怖いな～って思うだけだった。
けど、休憩時間になって知る。
運ばれたのは花火ちゃんと。

僕は居ても立ってもいられなくて、学校を飛び出していた。

うそだ。
僕の花火ちゃんは史上最強なんだ。
病院？
そんなとこ一生、無縁な場所なのに。
どうして？

僕は泣いていた。
こんなに弱いことが罪と思ったことはなかった。

病院に着くと、彼女は白い空間の中で眠っていた。
頭には包帯が巻かれていた。
そして腕も折れているのかギブスが施されている。

なんで？
有り得ない。

こんな重症なんて。

僕は彼女の元に近付く前に、泣き崩れていた。
自分で立つことが出来ず、看護婦さんが部屋に入ってくるまで僕はずっと泣いていた。

結局、僕は彼女に触れること無く、病院を後にした。
そして、家に帰り着くと、空気の読めない妹の陸が飛び蹴りで出迎えた。

「やった～見事、顔面直撃！　お兄ちゃんもこれ……？　あれ？　泣いてる？　そんなに痛かった？」
「……」

話す気も無い。
痛みも無い。
けど、陸は執拗に僕を攻撃した。

「どしたの？」

右のストレートパンチ。

「ねぇ？」

左のローキック。

「答えて」

左手の張り手。

僕はこんな攻撃を喰らっているのに、何も感じれなかった。
ムカつきもしなかった。
ただ、涙が流れるばかりだった。

陸は飽きたのか、何処かに行ってしまった。

僕はノロノロ、自分の部屋に行き、ベットに横になった。
考えることが多かった。
やるべきことも。
でも、今は寝ようと思う。

次の日、起きると身体が痛かった。
陸の奴め。
やっと憎しみが沸いたところで僕は叫んだ。

「くそ～」

叫ぶと痛さが緩和する。
なんてことはない。
けど、気合は大切だ。

僕は台所に向かった。
ひとまず、ご飯を食べないと駄目と考えたのだ。
目に付いた物は、生でもなんでも口に入れた。
何度か吐きそうになるけど、関係なく飲み込んだ。
僕は考えていた。
花火ちゃんの仇をとることを。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第十話　助っ人

僕は取り敢えず、花火ちゃんを襲った相手を探し出すことにした。
けれど、花火ちゃんに恨みを持つ人物など山のようにいるに違いない。
割り出すには、かなり時間が掛かる。
だから、ここは頭を下げよう。

「陸」

奴の部屋の前で名を呼ぶ。
しかし、寝ているのか、出ない。

「陸」

また呼ぶ。
でも、返事がない。
くそ。
僕は一刻も早く、花火ちゃんの仇を取りたいんだ。

「陸、頼みがある」
「頼み！！！」

いきなり、戸が開いた。
僕が頼む＝下手に出ると踏んだんだろう。
なんて邪悪な奴だ。

「頼みっていうのは彼女のことだ」
「あ～あのちび」

「兄の彼女をちびとか言うなよ」
「で？」
「彼女の仇を討ちたい」
「仕返し？　ダサッ」
「ダサくていいよ。けど、やらないと男じゃない」
「わかった。で、それを宣言したいだけ？」
「違う。相手を知りたいんだよ。分かる？」
「ちびがヤラれた場所は分かるよ。けどねぇ～」
「なんだよ」
「お金！！！！」

笑顔で言う。
嫌な奴だ。
でもそれで分かるなら良いさ。

「いくらだよ」
「五万円」
「は！？」
「は！？　じゃないし！　まだ上がるよ。今は六万円になったよ」

最低な奴だ。
花火ちゃんが史上最強だったら、こいつは史上最低だ。

僕は自分の部屋から七万円、持ってきた。
このお金は遊園地に渡すためのモノだ。
けど、仕方がない。

「ほら」
「はい。だめ～今はもう九万円です。けどこれは貰います」

と、七万円を奪われ、ついでに蹴り飛ばされた。
そして戸は固く閉ざされた。
なんて、奴だ。
悪魔だ。
僕は戸を蹴って、自分で調べることにした。
今は、インターネット社会だ。
調べれば、ある程度は分かる筈だ。

けど……。

花火ちゃんのことは載っていなかった。

なんでだ。
どうして？

泣きそうになる。
涙が寸前のところまで来たが、泣くわけにはいかない。
泣くのは一回だ。
あとは事が終わるまで泣けない。

どうする大地。
考えろ！
何をすれば良い！？

その時だ。
僕はフッと思い出した。

たぬき！！！！！

たぬきうどんだ！！！

僕は走って、花火ちゃんがハマっているうどん屋に向かった。
勢いを殺さずに店に入ると一人息子が怒ったようすで僕を見ていた。
いつもの僕だったら、怖気づくだろうけど、今は違う。

「すみません、花火ちゃんのことなんですけど？」
「なんだてめぇ？」

やはり、花火ちゃんが居ないと態度が違う。
ただのヤンキーみたいだ。
負けないぞ。

「花火ちゃんのこと、知っていますよね？」
「ねぇさんがどうした！？　ってかてめぇはなんだ？　たぬきを壊した奴か！？」
「違います。花火ちゃんが怪我したんです。それで……」
「ねぇさんが怪我？　それはねぇよ。あの人は最強だぞ」
「でも、怪我したんです。だから仇を取りたいんです」
「ボウズ、名は？」
「大地です」
「よし、大地。おれも協力するぜ。おれのことは……タヌと呼べ」
「はい。タヌさん」

こうして、タヌが仲間になった。
って！　ロールプレイングか！！！
違う違う。

「タヌさん。誰が花火ちゃんを襲ったか分かりますか？」
「おい大地よ。ねぇさんを気安く花火ちゃんなんて呼ぶんじゃねぇよ。ぶっ飛ばすぞ。てめぇもねぇさんって呼べ」

「……はい」
前に仲良さそうにここに来たこと知らないのかなぁ？
「で、相手は知らねぇよ。ねぇさんがヤラれたことなんて、初めて知ったからな」
「そうですか」
「けど、ねぇさんを倒す奴はそう沢山はいねぇ。俺が知ってる中じゃあアイツくらいだ」
「誰ですか？」
「虹っていう名の女だ」
「女？」
「ああ、女だ。伝説の女だ」
「伝説……」

伝説？
なんだそれ？
この平成の世に伝説って！？
漫画じゃあないんだから、もっとリアルな話をして欲しいもんだ。
でも真剣に聞くしかない。

「虹は単独犯だった。その点はねぇさんに似てる。けど、周りがほっておかねぇのさ。おれやてめぇみたいに慕う奴がいるんだよ虹にも。でも慕うやつが悪い。暴走族のヘッド、ヤクザの幹部、アメリカマフィアまでが、虹に惚れ込んでるんだ。だから伝説は腐るほどある。暴走族を集めて、警察とヤリ合ったり、アメリカのＦＢＩを数名、殺したとか」

すごい話だ。
でも確かに中学の頃に伝説の人の話は聞いたことがある。

それが虹って人だったなんて。
どうしょう？
そんな人とヤリ合うのか僕は……。

「おい。大地。不安がるな！　虹はそんな一人をイジメようなことはしない。やるのは下っ端だけだ。でもそれを探すのが手間だ。仕方ない、行くぞ」
「え？　どこにですか？」
「虹のところさ。おれさ。一回だけ出前を持って行ったことあるんだ」

なにっ～～～。
そんな人が出前を！！！
信じられない。
でもこれはチャンスだ。
やってやる。

「はい、行きます」

そうして、僕らは虹のところに……。
うん。
はい。
僕一人だけで行くことになりました。
タヌさんはまだお店があるから出れないらしいです。
使えない仲間だ。
けど、関係ない。
僕は花火ちゃんの彼氏なんだ。
仇は僕が取る。

そして、僕は虹の居る港にやってきた。

何故か、悪い奴は港に居て、倉庫に居る。
まぁ定石ってやつだろう。
僕は教えられた倉庫に入った。
その時点で、有り得ない人数が倉庫に居た。
不良だらけだ。
僕は震える足に一撃、入れて空気を吸った。

「僕の彼女を病院送りにした奴、前に出ろ～～～～～～」

すると、数秒で僕は男たちに囲まれた。

「なんだこいつ？」
「あのちびの仲間か？」
「弱そうだな？？」
「死刑だな」
「殴りてぇ」
「サンドバック決定～～～～」

おい、おい、なんだこいつら！！！
明らかにこいつらが花火ちゃんを病院送りにした奴らだろうけど、
数が多い。
ボコボコ決定だ。
でも負ける訳にはいかない。

「花火ちゃんの仇～～～」

殴りかかる。
けど、当らない。
代わりにお腹に重たい一撃が入る。
これは不良の蹴りだ。

的確に入った。
けど、まだまだ。
終わらないぞ。

「花火ちゃんに謝れ～」

ジャンプして、蹴ろうとする。
けど当らないで、僕は床に倒れてしまう。
そして、そこに数人の蹴りが飛んでくる。
クソ。
なんて、情けないんだ。
こんなところで何もできないまま、やられるなんて……。

僕はそのまま、気を失った。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第十一話　涙

目が覚めると僕はベットの上だった。
そして隣には花火ちゃんが眠っていた。
どうやら、僕は何も出来ないまま、やられたらしい。
なんて情けないんだ。
相手を殴ることも出来なかった。

僕は……。

ごめん、花火ちゃん。

弱過ぎて……

何も出来なくて。

大好きな人を傷付けられても何も出来ない。

僕は……。

「……大地くん？」

花火ちゃんは目を覚ましたみたいだ。
僕は急いで涙を拭いた。
泣いているところなんて、見せれない。
彼女は何も知らないからだ。
いや、知られる訳にはいかない。

「おはよう。花火ちゃん」

「うん。おはよう……大地くんも怪我を？」
「うん。ドジだから階段から落ちちゃったんだ」
「ふ～ん。そうなんだ」
「花火ちゃんは大丈夫？」
「大丈夫だよ。私も階段から落ちただけだもん」
「……うそは駄目だよ」
「本当だもん。少し眠たいから入院しただけだよ」
「……僕は君の彼氏だよ。弱いけど、頼りないけど、彼氏だから」
「じゃ、大地くんもうそは嫌だからね」
「うん。さあ寝よう。怪我、直らないよ」
「そうだね。おやすみ大地くん」
「おやすみ花火ちゃん」

花火ちゃんは直ぐに眠った。
本当にかわいい子だ。
そんな子を……。
僕の怒りが燃え上がる。
強くなりたい。君のために。

けど、退院は花火ちゃんのほうが早かったです。

僕より重症なのに。
弱っ僕。

……To Be Continued.

第十二話　空間

入院は退屈だ。
花火ちゃんが居ないと余計に暇だ。
話す相手も居ないし、時間を潰す手段も無い。
困った。

よし。
ここは人間観察しよう。

相部屋だから人間観察には事欠かない。
僕の部屋は六人部屋。
花火ちゃんが抜けたので、この部屋には五人しか居ない。
僕を抜けば、四人の観察が出来る。

では、開始する。

一人目はお爺さんだ。
いつも仏頂面。
ガードレールに花添え、人生あばよってしたいって感じだ。
お見舞いも誰も来ない。
なんか淋しそうでもある。

二人目は幼い女の子だ。
この子も高い頻度で仏頂面。
お見舞いは結構、来るけど、女の子は嬉しそうな顔をしない。
たまに「来るな」って言う声が聞こえる。

三人目は僕と同い年ぐらいの女子だ。

なんだろう？
僕をたまに見ている。
ハンターみたいな眼光で。
この人の観察は止めた方が良いかも！？
殺されても困るし。

最後の四人目は……包帯人間だ。
グルグルのグルグル～の人。
重傷者過ぎだろう！！！
やばいだろうこの人！
既に死んでるんじゃ？？？

以上、病室内の観察でした。

でも観察の対象はまだ居る。

そうです。
そうなんです。
白衣の天使たちです。
いや～おねぇさんの魅力がムンムンだ～～。

白いストッキング。
ボディラインの分かる制服。
あ～やばい。
僕には花火ちゃんが居るのに……。
こんな定番に嵌るなんて……。

最悪だ～。
三流だ～。
もうベタベタだ～。

ネタ不足だ～。
早く全快しないとナース症候群という新たな病に犯される。
っていうか、この空間は入院者にとってマイナス効果しかないんじゃないか？
駄目だ。
ここには居られない。
逃げよう。
ここから逃げるんだ。

病院から脱出なんて言ったら、また定番に走るのかと、批難されそうだけど、仕方ない敢えて言おう。

逃げる。っと。

僕はみんなが寝るのを待った。
そして、始まりだ。
脱出劇が。

ＢＧＭは何でも良い。
映画のカッコイイ奴が良いな。
スパイ大作戦とかＯＯ７でも良い。
脱出したら、もちろん、花火ちゃんに会いに行こう。

さて、まずは病室から出るか。
他の四人はカーテンを閉めて眠っているからバレずに病室を出るのは余裕……。
あれ？
包帯人間のところ、カーテン、開いてない？

いや、包帯人間だけじゃあない。
同い年の女の子のところもだ。
なんで？
起きてるの？
深夜二時ですよ？

やばい。
部屋を抜け出すのは無理だ。

よし、こうなったら、包帯人間と女の子も一緒に外の世界に連れ出してやる。

僕は大胆な発想で、二人の元に行った。

「ねぇ。僕は大好きな人に会いたいんだ。だから見逃してくれ。もしなんなら、君らも連れて行くけど？」

すると、包帯人間が、

「私も連れて行って」

こいつ、女か！！！！
しかも、若いぞ！

「ボクも！」

で、こいつはボク系女子か！
因みにボク系女子は自分のことをボクという女子だ。
これは僕が命名した。

よし。

三人でここを脱出だ！！！！

……To Be Continued.

第十三話　脱出

前回のお話の続きだ。

僕、大地と包帯人間とボク系女子を連れて、病院からの脱出を試みようとしている。

難関はナースルームだ。

正面出口付近にナースルームがある。

ナースルームを越えないと自由はない。

僕ら三人は何が出来るか念入りに話し込んだ。

「えっと……僕らって自己紹介もしてないよね？」

「うん」

「だね」

「では、僕からするね。僕は高二で、大地っていうんだ。特技はなし。何も出来ないからよろしく」

「……」

包帯人間が黙った。

場の空気を和ますために何も出来ないって言ったのに……確かに何も出来ないけど……。

一方、ボク系女子は笑っている。

よっし！

なんかやりました～って感じだ。

よしよし。

ボク系女子の感触は良しだ。

「じゃ次はボクだね。ボクも高二だよ。名前は七色って呼んでね。

特技は格闘技。以上かな？」
「七色ちゃんか～格闘技するんだ～」
「うんまあね」
「次は……」
「私、年は十四歳！　名前は包帯ちゃんで！！！」

なんじゃこの人。
ってか年下か！
年上かと思ったよ。
それよりも包帯ちゃんって……。
そのまんまですか？
ひねり無しっスか？
まぁ、良いさ。

「ほ…包帯ちゃん、特技とか無いの？」
「敬語が苦手」
「特技とはちょっと違うよ。なんか誰にも負けないものとか無い？」
「冗談が分からない所？」

あ～だから先ほどの僕の自己紹介、笑わなかったのか。
って違うし。

「えっと～他は？」
「冗談が分からないから正直者と思う！」
「う～ん」
「なに？　大の字だって何も出来ないんだから良いじゃん！　何も出来ない者と正直者。私のほうが役に立つし」

大の字ですか？
初めてそんな呼び名で呼ばれた。

けど、包帯ちゃんの意見ももっとだ。
ここは負けだね僕の。

「ねぇ大ちゃん」

こっちは大ちゃんですか？
やれやれだぜ～。

「なに？　七色ちゃん！」
「取り敢えず、廊下に出ようと思うんだけど……どうかな？」
「うん。いいけど。今の時間は見回りの看護婦さんが巡回している筈だから、時間をズラさない？？」
「ううん。それは得策ではないよ」
「どうして？」
「看護婦さんのシフト表がここにあるんだ」

はい？
なんで？
持ってるの～

「どこで…？」
「う～ん。なんて言うのかな。レズったら、くれたんだ」

はい？
何、そのレズったらって？
意味が分からない。
いや、分かるんだよ。
レズって……あの、えっと…女の人と女の人がこう、なんて言うんだ。
漢字で言えば、卍だよね？

卍……。
分かる人は勝手に想像して下さい。
けど、看護婦さんと女子高校生の卍か～。
どんな風に……？

「どんなことしたの？」
「包帯ちゃん、知りたいんだ。いいよ。でも大ちゃんは駄目だよ。
女同士の密なことなんだから」

なに～～～。
僕だって知りたいよ。
なんで？
なんで？
僕も知りたい。
あんなことやこんなこと。
そんであんなことを！！！！！

二人はこそこそと話している。
包帯ちゃんの表情が窺えないが、硬直しているみたい。
そりゃそうでしょう？
十四歳にその世界はディープですよ七色ちゃん！！

「すごい～～今度、私も七色おねぇ様としたい～」
「いいよ。けど、ここから出たらね」
「…うん」

なんじゃそりゃ～～～。
なにそのおねぇ様って？？
僕は大の字ですよ？
七色だから七味とか、じゃないの？

ってか、したいって？
何を？
何を？
あ～知りたい～～。

「おい、大ちゃん。君の息子くんが大きくなってるよ。パジャマだから分かるよ。若い子も居るんだから、自重しなさい」
「えっ？　うあ！！」

いつの間に！！！
なんてこった！！
想像で息子くんが！！！
って、情け無い僕。

「それより、大ちゃん、脱出の話に戻るけど、今がチャンスなんだ。このシフト表によると今が丁度、交代時間。帰る人間が複数いる。つまりこの帰る人間の最後尾に付いて逃げる作戦だ」
「おお～」
「すごいよおねぇ様～」

……包帯ちゃん、キャラ変わったね？
それより、これは凄い。
僕のプランとは大違いだ。
よし。
脱出だ。

「僕が先頭に立つから、君たちは付いてきて！」

おおっ。僕、かっこいいかも？
二人の女子を従えて脱出！

やばい。
子供が出来たら、聞かせてやろう！
けどね。

「いや、ボクが先頭に行こう。大ちゃんは後方を頼む」

カッコイイとこ、無し。
未来の子供に聞かせるネタも、無し。

そして、病室を出た。

静まり返った病院の廊下。
おばけとか…いないよね。

「ねぇ？」
「うわ！」
「いや、私だけど？」

なんだよ。
包帯ちゃんか。
普通に怖いよ包帯ちゃん…。
もう病院がベストな居場所だよ。

「なっなに？」
「大好きな人って誰なの？？」
「あ～ちょっと前に退院した女の子だよ」
「彼女なの？」
「うん。僕の大切な人だよ」
「で、なんで、大の字は入院したの？」

「それは……」
「包帯ちゃん、それは聞かなくて良いんだよ。人は何かのために生きてる。その中で壁や試練が待ち受けていたりする。けど、逃げる訳にはいかない。大ちゃんは男だから。そのために負った傷を癒すためにここにいる。それで良いんだよ。だからもう聞いちゃ駄目だ。いいね」
「うん」
「七色ちゃん、ありがとう」
「お礼はいらないよ。さあ、もうしゃべっちゃ駄目だ。来るよ前から」

視線を前方に向けると看護婦さんが歩いてきた。
手にはライトを持っている。
ヤバイ。
隠れる場所が無い。

「包帯ちゃん、大ちゃん、走るよ」

七色ちゃんの言葉で、僕らは走った。
ゴールは目の前だった。
出口はそこ。

でも、僕らは、走るのがまだ速すぎた。
まだ複数の交代した看護婦さんたちが出口のところに居る。
このままでは、僕らは捕まる。
駄目だ。

その時だった。
包帯ちゃんが僕と七色ちゃんより早く走り、看護婦さんたちの前に立ち、大声を出した。

あの姿だ。
誰もが驚く。
僕と七色ちゃんは、そのスキに外に逃げ出した。
包帯ちゃんも逃げ出すくらいの時間があった。
けど……。
包帯ちゃんはその場に留まった。

「ごめん、大の字に七色おねぇ様。私、いけない」
「なんで？　早く行こう」
「だめ～私、病気だから外には出れないの！」
「じゃ、なんで一緒に行くって言ったんだよ！」
「少しだけ、冒険がしたかった。でも……いけないよ」

なんだよ。
僕らは仲間だろ??
短い間だったけど、僕らには絆が生まれたのに……。

「行こう、大ちゃん。彼女は置いて行くんだ」
「そんなの」
「しっかりしろ。彼女はボクらのために残るんだ」
「けど…僕には出来ない」
「バカヤロウ」

僕は七色ちゃんに殴られた。
意味が分からない。
ってか、なんだこの展開？
おかしいぞ？
いや、おかしくないのか？
それすら、分からない。

「ボクは行く。また会おう大ちゃん」
「えっ？」

そういうと七色ちゃんは闇に消えた。
僕は間抜けな話、その後、直ぐに捕まり病室に戻された。
なんじゃ、この脱出劇は？
グダグダだ。

翌朝、僕は退院した。
そして、昨日、病気でいけないと言っていた包帯ちゃんも退院だった。
包帯のまま。
因みに七色ちゃんも退院だったらしい。

僕らはズッコケ三人組でした。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第十四話　対峙

今世紀最大の事件だ。
もう記者が居るなら、写真の嵐だ。

そう、その事件というのは僕と妹の陸が珍しく、喧嘩もしないで話をしているのだ。
しかも世間話。
すごい。
僕も退院直後で弱っている所為か、陸は僕にお茶などを煎れてくれた。
どうした？
熱でもあるのか妹よ。

「ってか、お兄ちゃん、聞いてよ」
「どうしたんだ？」
「昨日、転校生が来たんだ」
「転校生？　中三で転校は珍しいな」
「うん。けど、そいつ、包帯人間なんだ」

来た～～～。
包帯ちゃんだ。
そうか、十四歳だから中二って思ったけど、中三だったんだ。

「ほう、特殊な人が居るんだな」
「特殊？　変人だから。名前も包帯ちゃんって呼んでって言うんだよ。私、頭に来たから、後頭部に飛び蹴りを喰らわしたよ」
何をするんだ。

仮にも僕の脱獄仲間に。

「仲良くしろよ。病気だから包帯なんだぞ」
「病気？　違うよ。包帯の中に鉄板が入ってたし」
「鉄板？」
「そうそう。鉄板が入ってるから私の飛び蹴りがノーダメージ。気合を入れて、連打の拳をぶつけたけど、包帯しているところ、全部、鉄板。もう手が痛い痛い。しかも武器も中に入れてて、私の仲間、一人、血だらけになったから」

恐ろしい。
本当に包帯ちゃんか？
違う人物かも？

「なぁ陸、一回、その包帯ちゃんに聞いてくれるか？」
「なんて？」
「七色おねぇ様とあれから会ったかどうか」
「なに、それ？　まぁいいけど、それよりお兄ちゃんはいつまで家で療養するの？」
「う～ん。お医者さんに一週間くらいって言われたよ」
「そうなんだ」

なんだ。
不気味なやつめ。

けど、僕は知らなかった。
陸が僕の全快を待って、攻撃を開始することを。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第禁話　類似品

昨夜。
十時からドラマを観ていたのだ。
のほほんと、ポテトチップなどを食べながら。

けど、驚愕した。

そのドラマの題名は……

【ヤ★キーくんとメ★ネちゃん】

※大人の事情で一部を隠します。
※分かる人はこのドラマを観よう！

って、番組宣伝みたいになったが、僕は関係者ではない。

僕が驚愕したのは、題名じゃない！！！！
主人公の不良君の名前が大地なのだ！！！
僕と一緒の名前だ。
でも僕みたいに弱くは無い。
めっちゃ強いんだ。
そして、凄くカッコイイ。
隣で見ていた妹の陸は、キャーキャーと叫んでいた。
そして、僕の顔を見て、同じ名前を語るな。っと眉間を殴ってきた。
理不尽な。
僕も大地なんだ。
お母さんが名付けた大地のような男になるんだぞ僕は！

そして、ヒロイン。
まぁ優等生で、実は昔は……の人なんだ。
あんまり、内容を話すと関係者各所に謝罪をしないといけないから、
気になる人は観よう。
じゃあなくて、このヒロインがめっちゃ、可愛いんだ。
んで、セクシー。
ってかこの人、胸がでかい！！
男子必見って感じだ。
そして、このヒロインは不良君と同じ位に強い。
もしかしたら、このヒロインの方が強いかも？
で、僕が驚いたのはこのヒロインの名前が花！！！！

僕はここで気絶しそうになった。
僕の名前が大地。
僕の彼女の名前が花火で強い。
あれ？
あれれ？

類似してない？
似てない？

僕は震えた。
たぶん、色々な問題が起こる予感。
けど、本当に違うんです。
知らなかったんです。

僕らがモデルなんて！！！！

※はい。嘘です。たまたま、名前と内容が被っただけです。

……To Be Continued.

第十五話　変化

久々の学校だった。
まだ本調子ではない僕は、遅刻をしてしまった。
そのため、うどん屋の開店時間に遭遇した。
そこには一人息子のタヌさんが開店準備をしている所だった。

「おはようございます」
「ん？　大地じゃねぇか！？　あれからどうなったんだよ？　ねぇさんの仇は取ったか？」
「いえ、ボロボロのギタギタになって四週間入院しました」
「……そうか。でも頑張ったんだろ？　顔を見たら、分かるぜ」
「そんな、僕は何も出来なかったです」
「そう言うな。喧嘩は勝ち負けじゃあねぇよ。大事なのはここだ」
タヌさんは僕の胸を指で指した。

「ここですか？」
「そうだ！　ここで喧嘩しない奴は、駄目なんだ。それは暴力だ。でもここで喧嘩する奴は聖戦だ」
「……」

感動のシーンと思ったけど……聖戦って？
なんですか？
聖なる戦い。
もう僕は卑猥な方を連想したし。

「暗くなるな！　元気だせ！　男のナヨナヨは見てて、吐き気がする」

吐き気？
そこまで嫌か！

「わかりました。では」
「ねぇさんによろしくな！」
「え？　最近、来て無いんですか？」
「あん？　来てねえよ。まだ入院してんじゃねぇよな？」

おかしい。
花火ちゃんは僕より一週間早く、退院している。
プラス、僕が自宅療養している期間を入れると二週間も空白の時間がある。
大好きなたぬきうどんを食べに来ないなんて……？
もしかして……。
僕は走った。
彼女は、学校に行っていない可能性を考えたからだ。
そういえば、僕のお見舞いも来てくれていない。
二週間の間に何かあったんだ。

僕は彼女の教室をそっと覗いた。
花火ちゃんは……いた！！！
久々の花火ちゃんだ！
なんか、懐かしい！
必死にノートを書いてるよ！
あれ？
隣の男子、花火ちゃんに近いぞ！
あ！
匂いを嗅いでる！
待って！

その花火臭は僕のもんだ！

ガラガラ。

「何をしている！　二年」

「いや、教室を間違いました」

僕は先生の睨み一発で退散した。

けど、おかしい。

花火ちゃんがあんなに接近されて、気付かないなんて……。

何かあるのか？

僕は考えながら、自分の教室に入った。

ガラガラ。

ん？

反応は？

久しぶりなんだけど？

先生も無しですか？

「おはようございます」

小さい声でいう。

「おはよう、席につけ」

「はい」

あれ？

誰も反応が無い？

でもガヤガヤしている。

なんだ？
しかし、休憩時間でその理由が分かった。
友人ＡＢＣＤがこう言った。
「お前、停学中だったらしいな？」
「しかも、喧嘩だろ？」
「何人も半殺しにしたとか？」
「今回だけじゃなくて、これまでボコにした人数は数え切れないんだろ？」

え？
どういうこと？
停学中って？
僕は入院してて……。
凶暴キャラになってる？
でも誰が？

歪む様に、溶ける様に、無くなる様に、霧散する様に、壊れる様に、
それは近付いていた。
僕はこの時、伝説の人と戦うとは思ってもいなかった。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第十六話　霹靂

学校が終わり、僕は花火ちゃんの元に走った。

「花火ちゃん！！」

「えっ？　大地くん！」

彼女は泣きそうな顔をしていた。

疲れているようだ。

「どうしたの？　大丈夫？　なんか疲れてない？」

「少しだけ疲れた。なんか大変だね」

「何が？」

「コンビニのバイト」

へ？

なんて？

「花火ちゃん、今、なんて？」

「コンビニのバイトだよ。あれ、疲れるねぇ。お客さんって殴ったら駄目みたいだもん」

当然だ。

殴っちゃ駄目。

「けど、なんでバイトなんて？」

「大地くんがいない間、私が代わりにしょうって思ったんだよ」

実は花火ちゃんには内緒にしていた。

でも、なんでバレたんだろう？

「陸に聞いたの？　バイトのこと？」

「陸ちゃんとは……」

「あっそうだよね。うん。他の人」

「病室が一緒だった七ちゃんから聞いたんだ」

「七色ちゃんから？」

「うん。色々と教えてもらったよ。私のためにごめんね。怪我までして」

「いや、それは良いんだけど……」

けど、なんで、七色ちゃんが知っているんだ？

僕は一度もバイトも怪我の理由も話した記憶はない。

バイトの話だって知っている人間は限られる。

まあ、いいか。

深く考えても仕方ない。

たぶん、バイトはお客さんで来たんだろう。

んで、怪我の事は適当に言ったのが、たまたま当っただけ！

そうに違いない。

でも、気になるのは学校で聞いた話だ。

停学中だったとか、いつも喧嘩をしているみたいにキャラ付けされていた。

花火ちゃんは知ってるのかな？

「ねぇ？　花火ちゃん、僕が停学だったって話は聞いた？」

「ん？　知らないよ。二年生の話は一年生までは降りてこないよ」

「だよね」

そうだよね。

う～ん。

なんだこれは？
誰か僕を嵌めようってしてるのか？
分からない。

「あっ！　大地くん、見て！」
「ん！？　あっ！！」

花火ちゃんが驚愕していた。
そこには包帯人間が立っていたからだ。
僕らは歩きながら話しているけど、まだ校内なので随分、先の門の外に立っているんだけど、それは遠目でも分かった。
たぶん、包帯ちゃん。
陸のクラスに転校してきた子だったら、違う可能性もあるけど……。
でも近付くと、

「大の字！」

と、声を上げた。

「包帯ちゃんか！！」
「大地くん、知ってるの？」
「うん。病室の仲間だよ。花火ちゃんは見たことない？」
「見たこと無いよ。こわい」

震える花火ちゃんは、僕の後ろに隠れた。
こんな花火ちゃんは、初めて嬉しい。
僕が頼られている感がするからだ。

「大の字が陸の兄貴って知らなかった」
「僕も君が陸と同じクラスになるとはね。予想もしなかったよ」

「けど、陸は嫌いだ」
「それは僕も同意する」
「あっメッセージ聞いたよ。七色おねぇ様にはあれ以来、会ってないよ」
「そうなんだ。僕も会ってないから、あの人は何、してるんだろう？」
「さぁ？　唯一の脱獄成功者だからね。たぶん、逃走してるんだと思う」
「それは無いよ。そうだ。紹介するよ。同じ病室に居た僕の彼女だよ」
僕は無理矢理、花火ちゃんを包帯ちゃんの前に出した。
すると、
「いや～」
と、包帯ちゃんの腹に一撃を入れた。
「……」
「大丈夫？」
「ん？　ああ私は大丈夫だよ。鉄板を入れてるから、それよりもそっちは？」
「花火ちゃん……え？」
花火ちゃんの手は血だらけだった。
骨も折れているみたいだ。
なんだろう？
花火ちゃんがおかしい。
鉄板でも、隕石でも貫通出来る拳が粉砕するなんて！！？
もしかし、花火ちゃんは普通の女の子になろうとしているんじゃ…

……。

……To Be Continued.

第十七話　七色

僕と包帯ちゃんで、花火ちゃんを病院に運んだ。
と、言っても花火ちゃんは普通に歩けるので、僕ら二人は付き添いみたいなもんだ。
けど、花火ちゃんは内心、穏やかではない筈だ。
これまで、史上最強の名を欲しいままにしていたのに、今回、包帯ちゃんの仕込んでいた鉄板で右拳を粉砕されたのだから。
僕なら、人知れず泣いているだろう。
でも、ここは、僕と花火ちゃんとは違う所だ。
花火ちゃんは涙一つ見せない。
男の中の男。
いや。
女の中の女と言いたい。

けど、僕はずっと気になっていた。
花火ちゃんの拳がどうして、鉄板に負けるのかを。

花火ちゃんの診察を待っている間に、僕は包帯ちゃんと話していた。

「ねぇ、ちょっといい？」
「何、大の字？」
「そのね。包帯の中に隠してある物、見せてくれないかな？」
「大の字…変態！」
「え～違うよ！」

包帯ちゃんは自分の格好を鏡で見たことが無いのだろうか？
悪いけど、包帯ちゃんの方が変態だ。
そんなもん、警察が見たら、即逮捕だよ。

まぁ、それは良いとして。

「私、大の字が、そんな変態とは…」
「いや、誤解だよ。鉄板を見せて？」
「鉄板？　うん、良いよ。ってか早く言って。私が馬鹿みたいじゃん！」
「いや、ごめん」

何故か誤ってしまった。
僕は悪くない筈なのに……。
それより鉄板だ。
ってか結構、重いなぁ。
包帯ちゃんはこんなの持って生活しているのか？
いやいや、疑問点が違う！！！
鉄板は重くて、厚い。
でも……花火ちゃんだったら、こんなもん、簡単に粉砕は可能な筈。

何故だろう？

僕は鉄板を包帯ちゃんに返して考えた。
入院している間に、力を失った！？
そんな訳ないか。
有り得ない速度で傷を治癒した花火ちゃんだ。
力を失っているとは思えない。
う～ん。

そうこうしていると花火ちゃんが診察を終えて、出てきた。
手は包帯グルグル巻きにされている。
一部、包帯ちゃんみたいだ。

「大丈夫、花火ちゃん？」
「大丈夫だよ。軽くもうお箸を持てないくらいだよ」
「それって重症なんじゃ？」
「感覚が無いだけだよ。大地くんも心配症だね」
「え…うん」

感覚が無いんだ。
もう右手は再起不能ってこと？

「あの花の字ちゃん、私の所為でごめん」
「気にしない気にしない。もし私が全力だったら、ここにいるのは包帯ちゃんだよ」

笑う花火ちゃん。
たぶん、あのストレートは全力だ。
だから、拳が粉砕したんだ。

その後、包帯ちゃんと別れて、僕と花火ちゃんは無言で歩いていた。
花火ちゃんはかなり落ち込んでいるようだ。
こんな時、なんて言えば良いんだろう？
……。
情け無い。
僕は何も言えないらしい。
好きな人が苦しんでいるのに、それを拭うことが出来ないみたいだ。

「大地くん」
「…うん？」
「私、だ、じょうぶだから…ね」

大丈夫な訳が無い。

彼女は震えていた。
どうしたんだろう本当に？
「だからボクが言ったんだ！　花ちゃん」
振り返ると、そこには金髪の女の子が立っていた。
ん？？
誰だ？
こんな金髪知らない…？
待ってよボクって言ったよね？
まさか！？
「七色ちゃん！？」
思わず叫んでしまった！
「久しぶりだね大ちゃん！！　あの時は殴ってごめんね」
「良いよ！　それより髪…」
入院中は黒髪だったのに…？
イメージチェンジかな？
「ボクの基本は金髪さ！　それよりも花ちゃんだ」
「七ちゃん…」
なんだ？
花火ちゃんが急に弱くなったような？
「ボクは言ったよね？　君は弱い人間だって！？　大ちゃんに守って貰っているって！　遊園地のこと、忘れたの？　君の所為で大ち

ゃんはやりたくも無いバイトをして、機材、建物を弁償しようとしている。だから暴力は駄目だ。鉄を殴れば、拳は砕ける。治癒も人並み。完全に後遺症を残す。君の身体の構造は一般人となんら、変わらない！」
「…うん」

七色ちゃんは一気に捲くし立てた。
ってかなんで、遊園地のことを！？
それにバイトも！？

「えっと七色ちゃん…」
「大ちゃん、ちょっと待って、話は終わっていない」
「あっごめん」
「花ちゃん。君は人並みなんだ。心も身体も。君は誰よりも弱く、儚く、壊れやすい。誰かに勝とうとは思わないことだ」
「…はい」

なんだろう？
僕はイライラしていた。
どうして、七色ちゃんに、そこまで決め付けられる必要があるんだろうか？
それに花火ちゃんは弱くない。
史上最強なんだ。
誰にも負けない。
負ける訳がない。

「ねぇ七色ちゃん、やめてよ」
「なんだい？　大ちゃん」
「いや、だから花火ちゃんにそんなこと、言わないでよ」
「ん？　君は花火ちゃんを守りたくないのかい？　彼女はいつも自

ら、戦火に飛び込む。そして自滅する。病院にも運ばれる。わかるだろ？」
「分かるよ。けどやめてよ。僕は今までの花火ちゃんが好きなんだ」
「滑稽だね。彼女一人も守れない男が」
「…確かにそうだけど…守るよ。死んでも」
「男の子が使いそうな言葉だね。さぁ、ボクは行く。じゃ、また」

七色ちゃんは行ってしまった。
それより、花火ちゃんだ。
なんだか、やっぱり花火ちゃんがおかしい。
七色ちゃんと話を聞いてから、どんどん弱くなっているような…？
僕はまた何も言えないまま、出来ないまま、立ち尽くしていた。

……To Be Continued.

第十八話　話術

僕の知り合いで頭の良い奴なんて、一人くらいしか思い浮かばない。
そして、そいつは出来る限り、思い浮かべるのを遠慮したい奴だ。
だって妹だから。

「ちょっと陸いいか？」

リビングで寛いでいる妹に問いかける。

「何？　私に襲い掛かるとか言うんだったら、あのチビと子作りしなよ」
「……」

こいつ！！！
どんな中学生だ！
子作りだ？
まだキスもまだですけど！！
いやいや、ここは冷静になろう。
また、前回のような失敗をしないために。

「いや、違う。彼女のことで相談したんだよ」
「相談？　お兄ちゃんが？　私に？」
「そうだ」
「へぇ～何？　聞いてあげる。取り敢えず、聞くだけね」
「ありがとう。簡単に言うぞ。彼女の身体能力が極端に落ちた。どういうことなんだろう？」
「何それ？　格闘アニメの話？　二次元は無理～」

「いや三次元だよ。お前も知ってるだろ？　花火ちゃんの強さ？」
「うん。あれは化物だね」
「それが、今はもう化物じゃあないんだよ！？」
「いいじゃん、か弱い女子好きじゃん、男って！！」
「う～ん。そうだけど…でも花火ちゃんじゃあないからそんなか弱い女子は！」
「で？　私にどうしろっと？　原因を探れって？」
「いや、そんな事ってあるのかなぁ～って？」
「あるんじゃん？　実際、なってるんだから」
「原因として何が考えられる？」
「簡単に言えば、ショックからだろうね？　もしくは怪我とか？」
「怪我じゃないと思う…ショックかぁ～？　たとえば？」
「お兄ちゃんって本当にアホだね」
「なんでさ？」
「言葉の暴力。話術。催眠術。人間を操作するのは、口で、それを受信するのは耳！　つまりお兄ちゃんがキツイことを言ったんじゃあないの？」

う～ん。
そう言われても、僕と花火ちゃんは喧嘩したこと無いし。
言い合いも無い。
ってことは、誰かに何かを言われた？

あ！

「なぁ陸、弱い弱いって言われ続けたら、人間って弱くなるものなのか？」
「わかんないけど、激励の言葉とか、力を貰った言葉ってのがあるし、酷い言葉を言われて、自殺した人も居るから、なるんじゃん？」
「そうか」

僕は分かった。
原因は七色ちゃんだ。
あの子が花火ちゃんに言う言葉はマイナスな言葉だ。
同情しているような、励ましているような、言葉に聞こえるけど…
あれは、陥れる言葉だ。
今度、会ったら言おう。

でも、僕は気付いていない。
これからの戦いを。

……To Be Continued.

第十九話　負け犬

七色ちゃんに会う機会が無かった。
花火ちゃんの呪縛を解くには七色ちゃんの言葉が必要なのに。

はぁ。
でも最近、疲れた。
僕のほのぼのライフがこうも崩れるとは。

花火ちゃんとデートして、
花火ちゃんとキスして、
花火ちゃんを家に呼んで、
花火ちゃんと映画に行って、
花火ちゃんと受験勉強して、
花火ちゃんと……。

普通の生活が崩れた。
単に、花火ちゃんは人より数段、強くて……。
でも、可愛くて、愛らしくて……。

……本当に普通だった。

たまに何処で間違えたのかなぁって思う。

もし、僕が花火ちゃんと出会わなかったら…。
いや、止めよう。
過去を振り返るのは、お爺さんになってからで良い。

今は七色ちゃんを探そう。

ってか、最近、何かを探す率が上がっているような。
こんなだったら、またワンパターンやろうって言われそうだ。
早く七色ちゃんを見つけて、花火ちゃんを元の強さに戻そう。
そして、またほのぼのライフを手に入れるんだ。

さて、七色ちゃんの情報はどういう風に集めたら良いんだろうか？
ここはまた陸に聞きたいけど、調子に乗ると殺される。
やはり、タヌさんに聞こう。
あの人だったら、知っているかもしれない。

僕はうどん屋に向かった。

お店に入る。
ん？
今日はタヌさんはいないのか？

「あの～すみません」
「いらっしゃい。一人ですか？」
「客じゃあないんです。あの～タヌさんは？」
「あ～あいつは病院です。出前中に衝突しましてね」
「なんとですか？」
「いや～良くわからないんですけどね、虹があ～だ～こうだで」

虹？
また虹が関わって来るなんて。
考えても仕方ないから僕はタヌさんの入院している病院に向かった。

「タヌさん」
「おう大地か！」

「どうしたんですか？」
「ああ、虹が動き出したんだ」
「虹なんですか？」
「やり口が虹だ。間違いない」
「でもなんで、タヌさんが…？」
「てめぇの仲間だからだよ」
「僕の？」
「もちろん、てめぇもねぇさんの仲間だろ？」
「また花火ちゃんが狙われるって事ですか？」
「ああ、間違いねぇよ。だから気を付けろ！　てめぇの家族、友達、みんながヤラれるって思え。虹は単独犯って言っただろ？」
「はい」
「単独で潰しに来ているんだよ」
「一人ですよね？」
「ああ」

一人で行動。
僕はそこがおかしいと思う。
一人で全てが出来るんだろうか？
疑問だ。

……To Be Continued.

第二十話　孤独

虹。
結局、僕は虹という人の事を知らない。
花火ちゃんと僕を病院送りにした人たちのボスという事しか知らない。
どうする？
僕は出口の無い迷路に迷い込んだ心境だった。
七色ちゃんの事もある。
そして虹。
タヌさんが言うように僕の友達や家族が狙われるんだろうか？
それは嫌だ。
今は花火ちゃんだって、弱いんだ。
しっかりしないと駄目だ。
こんな時、力があれば良いんだけど、僕はやっぱり弱いから……。
暗くなる。
考えたくないのに、暗くなる。
どうすれば良いんだろうか？
次の日。
僕は花火ちゃんと待ち合わせをした。

もちろん、学校があるので、登校を一緒にしようと考えたのだ。
でも……。
それが駄目だった。
朝から僕らは不良に囲まれてしまった。
何故だろうか？
待ち合わせの場所に着いた瞬間に囲まれた。
僕は必死に花火ちゃんの盾になり、全速力で学校にまで走った。

「はぁはぁ。大丈夫？　花火ちゃん？」
「うん。平気でも……」
「でも？」
「くやしいよ」

花火ちゃんは拳を握り、そう言った。
確かに悔しいと思う。
今まで、あんな不良、一瞬で地獄に叩き落していたんだから……。

「僕が守るから」
「……うん」

悲しげな顔をして、自分のクラスに入っていった。
僕はその後ろ姿を見送るしか無かった。

花火ちゃんの悲しそうな顔を見ていると僕まで、気持ちが憂鬱になってしまった。
今日は誰とも喋りたくない。
孤独で過ごしたい。
僕は今日に向かうと、視線の先にクラスメートが廊下で談笑していた。
一応、朝のマナーなので声を掛けようとしたが、僕の顔を見るなり、

教室にダッシュで入っていった。
オマケに開けていた窓や戸を閉められた。

なんだ？
僕は疑問符を浮かべながら、戸に手を掛け、スライドさせた。

えっ？
嘘？
こんなことって……。
平成の世。
鳩山さん……いや菅さんの守る日本でこんなことが！！！
古典的過ぎる。
僕は真っ白なチョークが付着した黒板消しを見事に頭に喰らった。
髪の毛は真っ白だ。
もう老人です。

って……。
教室内は誰も笑っていない。
と、いうより視線を外している。

これって……
イジメ？
いやいや。
そんなことはない。
これは何かの間違い。
ギャグだ。
もしくはハメる相手を間違えたんだ。
そうに違いない。

僕は自分の席に向かった。

でも……。
ある場所にある僕の机が無い。
椅子も。

……確実なイジメだ。
僕が退院してから、教室内の雰囲気が悪かった。
僕も凶暴キャラになっていたが……。
あれはギャグじゃあなかったんだ。

……To Be Continued.

第二十一話　イジメ

イジメ。
日本中で起こっているだろう犯罪的な事。
大人の世界から子供の世界、下手をすれば赤ちゃんの世界にも存在するかもしれないこの現象。
集団性が引き起こす言葉や暴力での精神攻撃。
耐えれない人は死を選ぶ人も居る。

僕はどうだろうか？
机と椅子が無い。
これは予備の机と椅子を持って来たら、解決。
でもなぁ……。
いきなりのこの状況は辛い。
イジメって初体験だから…。
これまで生きてきた世界がどれほど、幸せだったと思い返せる。

あ～空気君は辛い。
みんな僕と視線を合わせない。

なんでだ？
いきなり人間は変われるのか？
いや、僕が入院中や家で休んでいる間、変わったんだろう。
どうする？
先生に相談？
親？
変化球で陸に？
……。

どれも打開策にならない気が……。

ここは勇気を出して、友人Ａに聞こう。

「ねぇ？　どうして僕はイジメの対象になったの？」

「……」

駄目だ。

次は友人Ｂだ。

「ねぇ？　ちょっと良い？」

「無理」

「……」

進歩はあったのかもしれない。

答えてくれた。

まぁ無理っていう返答はないけれど。

さて、どうしたもんか？

花火ちゃんには言えないし。

困ったもんだ。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第二十二話　悪辣な暴力

イジメを受け始めてから、一週間が過ぎようとした。
人間とは便利もんだ。
イジメも最初は躊躇するが、一週間経過すると慣れていく。

大変な仕事も慣れれば、平坦というが……。

イジメに慣れることがあるとは……。
世の中、渡ってみないと分からないことばかりだ。

ここで、どんなイジメを受けたか、思い出そう。
慣れは怖いから。

チョーク付きの黒板消しが頭上から落下。
机、椅子が紛失。
教科書、ノートが何故かトイレで発見。
上履きに画鋲。
机の中に、カエルの死体。
机の上にイチゴジャム。
椅子に画鋲。
椅子に汚物。
先生の配るプリントが僕まで回ってこない。
空気君。
体操着を隠される。

……。
いや、結構なことをされているなぁ僕。
まぁ、まだ直接的なことが無いから良いのか？

けど、なんでこんなことになっただろうか？
謎だ。

僕はここで何を思ったか、友人ＡＢＣＤを自分の席に呼び付けた。
彼らも、最初は動揺していたが、彼らは何を感じたみたいに寄って来た。
僕もここで、止まっている場合じゃあない。

情報だ。
情報が必要なんだ！

「ねぇ、何でも僕をイジメるんだよ？」
「はい？」
「あ～」
「う～」
「え～」

なんだこいつら？
話したいけど、話したいって感じだ。

口止め？
やはり、黒幕が！

「もしかして、誰からの指示？」
「あ！」
「ヤバイ」
「仕方無い」
「すまない大地！」
「え！？」

友人Ａの拳が僕の顔にヒットする。
思わず、床に転がってしまう。
でも次の攻撃が迫っていた。
友人Ｂが空中に飛んでいるのだ！
そのまま、ドロップキックが腹に！
呻く僕。
けど、瞼を閉じる余裕も無い。
友人Ｃが椅子を持ち上げている。
待って！　待って！　待って！
そして振り下ろす。
僕は間一髪、転がって回避するが、次に天井を見た時、机が見えた。

「あ」

グシャ。

と、音がした。
僕は音の正体を探って、目玉を動かす。

「あれ？」

両目を動かしている筈なのに……。
左目が……。

あのグシャ。

そうか、僕の左目だったか。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第二十三話　山盛りの涙

叫び声を上げなかったのは、自分でも凄いと思った。
あれから、誰が呼んだか、分からない救急車に乗せられ、僕は病院に搬送された。
別段、入院とかは無かった。
ただ、左目は机の角に潰され、視力を失った。

はっはは。

僕、左目が見えないんだ。

はっはは。

なんだよ。
イジメってこんなこともされるの？
なんだよ。マジで。

僕は泣いた。
けれど、左目からは何も流れない。
その代わりに激痛が走るだけだった。

僕は、病院にベンチで座っていると妹の陸が迎えに来た。
なんとも言えない顔をしている。
何を言おうか、何も言わない方が良いのか、迷っている顔だ。

「よう、陸」

仕方ないから、僕から声を掛けてやった。

「うん」

珍しく、泣きそうな顔をしていた。
僕はアイツの泣き顔を知らない。
いつ泣いたかも、直ぐには思い出せない位だ。

「陸、帰ろう」
「…うん」

何故か陸は黙って、僕の後ろを付いて来た。
普通、兄弟だったら、並んで歩くのに、陸はそれをしない。
ハァ。
困った妹だ。

僕は速度を落とし、陸と並んだ。

「並んで帰るぞ」
「お兄ちゃん…」
「なんだよ？」
「…左目は？　もう見えないとか無いよね？　私の攻撃とか避けられないよ。片目じゃあ」
「…あ～もう見えない。眼球が完全に破損しているってさ！　だからお前も僕に攻撃を…おい？」

僕は妹がいつもの調子で話すから、もう大丈夫と思っていた。
けど、違った。
陸は立ち止まり、泣いていた。

最初は声も出さずに泣いていたのに、時間が経過するに連れ、声を出して泣いた。

「だから……ふぁふぁ陸はひぃく、ひっく嫌だったの！　あのチビ女がお兄ちゃんの彼氏になるの！　うぐぅ。もう別れてよ！　ひぃん。うぁあ～ん陸のお兄ちゃんの戻ってよ～」

子供のように泣いていた。
そして、久しぶりに聞いたと思った。
陸が自分のことを「陸」という所を。

ごめん。陸。
僕、何も言って上げれない。
ただ、僕のために泣いてくれてありがとう。
僕は大丈夫だ。
左目が無くても、涙が流れなくても、お前が泣いてくれるって分かったから。
そう僕は大丈夫。

……To Be Continued.

第二十四話　左目

僕は左目を失ってから、ほんの少しだけ引きこもりの仲間入りしてしまった。
そして妹の陸は、あれから人が変わったみたいに僕にべったりになってしまった。

う～ん。
妹に好かれるのは意外にむず痒い。
昔みたいに瀕死状態になるまで殴る、蹴るされる方が気が楽だ。
それに、妹も何故か引きこもりになってしまい、学校を休んでいる。
これは困った。
けど……。
学校に行くのは怖い。

家から出ようとすると、左目が疼き出す。
まるで呪いを左目に喰らった気分だ。
はぁ。
憂鬱だ。

今日も外に出る事が怖くって、僕はリビングでアニメのＤＶＤを見ていた。

最近のアニメは凄い。
絵が綺麗で、ストーリーがしっかりしている。
僕の生きる世界もこんなアニメのような世界だったら……。

いや……止めよう。
世界を求める事は無理なんだ。
現状を変えるのは自分。
ステージを豪華に飾るのも自分。

そう自分なんだ。

僕はＤＶＤを見るのを止めて、左目を開ける事にした。

見えない。
当たり前だ。
眼球は完全に破損している。
それを戻す事は出来ない。
でも……。

「お兄ちゃん？」

陸が僕の様子を見て、声を掛けてきた。
それもそうだ。
僕は見える右目を瞑り、左目を開けているのだ。
普通の人なら驚くだろう。

「見えようと思って……見える訳ないけど、見たいんだ」
「……お兄ちゃん」

陸は泣きそうだった。

でも、違うんだ。

ここから始めないと駄目なんだ。

この左目は使えない。
もう使え物にならない。
僕は何処かで、見えるんじゃあないかと思っている。
朝、起きると見る。
そう思っている。

だから、諦めるんだ。

左目……バイバイ。

……To Be Continued.

第二十五話　訪問者

珍しく家にお客が来た。
その人物は妹の陸と同級生で、僕が虹の部下にボコボコにされて、入院していた病室が一緒で、病室から脱出仲間である包帯ちゃんだった。

相変わらず、包帯ちゃんは包帯グルグルだった。

「大の字……左目どうしたの？」
「いや……」
「お兄ちゃんに話しかけるなよ包帯！」

どうやら、陸は包帯ちゃんが嫌いらしい。

「五月蝿い！　陸の字は黙れ！　で、大の字、その左目は？」
「……言いづらいけど、イジメられて、クラスの奴らに……情け無いよね」
「お兄ちゃんは悪くないじゃん！　陸は何があってもお兄ちゃんの味方だよ」
「ああ、ありがとう」
「……大の字…」

包帯ちゃんは何故か悲しそうだった。
これは僕の所為だ。
僕が弱いから。

「包帯ちゃん、気にしないで良いから。それより今日は何？」
「うん……陸の字が学校を休んでいるから、様子を見に」

「そうなんだ。優しいんだね。ありがとう妹に代わってお礼を言うよ」
「陸は別に来て。なんて言ってないし。勝手に来るなよ！　この妖怪！」
「何を！！　このチビ。弱虫。シスコン！　兄馬鹿！　強がり！　淋しがりや！　ウンコ！」
「はい！？　なにこの包帯野郎！」

あ～なんか、子供の喧嘩に……。
まぁ、しばらく、傍観していよう。

「陸の字、包帯を馬鹿にするとヤルる？」
「ヤル？　ってなんですか？　レ○プですか？　セ○クスですか？　強姦ですか？」

妹よ。
下品だよ。

「殺しのほうだよ！」
「望む所だ！　かかってこいや！」

あ～バトルに～。
陸が飛び上がり、飛び蹴り。

包帯ちゃん、これをどう受け……。
え！　何！　仁王立ち！？
棒立ちだって！

「死ね～」
「ふん！　雑魚が」

飛び蹴りは包帯ちゃんの腹部に入るが、包帯ちゃんはビクともしない。
代わり、陸が足を痛めていた。

「また鉄板を入れてるんでしょ！？」
「当たり前！　あっ！？　大の字にもこれ上げる！」
「ん？」

投げ渡されたのは、真っ黒な眼帯だった。
でも、普通とは違う。
少しだけ、重いけど……。

「何これ？」
「極細金属で編み込まれた眼帯。ライフルと貫通弾以外を防弾して、防刃も兼ね備えてるんだよ」

そんだそれ！
僕は戦争に行くんですか？
でも、ありがとう。

「陸のお兄ちゃんに変なもん渡すな！」

陸は、僕の座っていたソファを掴み、包帯ちゃんに投げた。
もちろん、僕は奪われたソファから転げ落ち、腰を強かに打ち付けた。

「だから無駄」

ソファは包帯ちゃんに的確にヒットしたが、やはり、ビクともしな

い。
強いぞ包帯ちゃん！
「無駄？　これならどうだ！」
「え？　陸それは！」
陸は整髪料のスプレーを持って、構え、その先にはライターをチラ付けている。
陸さん。
これは、凶器ですけど……。
「来いよ」
「くらえ！」
あ～包帯ちゃんの包帯が燃える……。
家の火災報知器が鳴る。
「え！」
包帯が取れた、包帯ちゃん……。
鎧ですか？
包帯ちゃんの正体は鎧ちゃん？
「卑怯だぞ！　包帯ちゃん！」
「包帯ちゃん？　今は鎧さんだ！」
包帯ちゃん改め鎧さんは勢いで、ガラスを突き破り、外に。
ってか場外乱闘ですか？

もちろん、陸も外に。

あ～凄い二人だ。

……To Be Continued.

第二十六話　続・訪問者

妹の陸と包帯ちゃん改め鎧さんが戦っている。
最初は室内だったけど、今は庭でヤリ合っている。
まぁ、鉄壁の防御の鎧さんと生身の陸とでは、勝ち負けは明らか。
完全にスタミナ切れを起こしている陸は、マックス時の半分も力が出てない状態だ。
息も切れ切れ、繰り出す拳には力も無い。
さらば。
妹。
君は戦士で戦死だ。

さて、早速、包帯ちゃんいや、鎧さんがくれた真っ黒な眼帯をしよう。
これまで、僕は左目をずっと閉じている状態だった。
意識をしていないと左目の瞼が開くので、無理矢理にテープで開かないようにしていた。
けど、これで、瞼を閉じるストレスから開放される訳だ。

よし。
装着。
鏡、鏡っと。

僕は鏡の前に立ち。
言葉を失った。

海賊だ。
ワンピ〇スを探さなきゃ！

そんな感想が飛び出た僕だった。
でも似合わない訳ではない。
似合っている。
意外にも！

そうだ。
陸と鎧さんにも見せてあげよう。

「お～い二人とも……あっ」

僕の時間感覚が消滅した。
そこには変わり果てた……。

「なんでお前がいるんだ！！　お兄ちゃんに近付くな！」
「大の字、こいつは？　何？」

なんで？
僕は君に心配を掛けたくないから……。

君はどうしてしまったんだ？
何が？
僕はボロボロになっていた彼女の花火ちゃんに手を差し伸べる事も
出来ずに、涙だけを流していた。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第二十七話　ボロボロの花火

制服は至る所が破れていた。
そして露出している所は痣や切り傷が多数にあった。
何があったんだろう？
あの花火ちゃんがこんなボロボロで、負け犬みたいになるなんて……。

「大地くん？」

彼女は首を傾げる。
そうだ。
前の僕なら、満面の笑みで、全力の喜びを放出している筈だ。
でも……。
足が動かない。
顔が笑顔になるのを拒む。
喜びなんて……。
湧き上がる筈も無かった。

「帰れ！　お前なんて陸たちの家に来るな！」
「陸の字！　言い過ぎだ！　この人も訳があってここに来たんじゃないの？」
「知るか！　ってかおめぇも帰れ！　この妖怪！」
「なに～」

またバトルを再開する我が妹と鎧さん。

いや。
そんなことはどうでもいいんだ。

花火ちゃん。
声を掛けないと駄目だ。

「ひっ久しぶりだね」
「うん」

舌が回らない。
何故か震えていた。

「どうしたの？」
「ちょっと会いたくなった大地くんに」
「そうなんだ……ありがとう」
「うん……じゃあ帰るね」
「え？」
「帰るよ。陸ちゃんも怒ってるし」
「いや、あれは気にしないでいつものことだし」
「じゃあ、ちょっとだけお邪魔していい？」
「うん。ここだとあれだから僕の部屋に」
「……うん」

なんだ？
この流れ？
自然に僕の部屋に誘ったぞ！
あ～でもボロボロの花火ちゃんだぞ？
僕も左目のことを隠しているし。
あ～エッチ的なことは無いかぁ～。
シリアスでも男子はいつもエロい。
これは教訓だな。

花火ちゃんが僕の部屋に入った。

緊張する。
けど、何かをする訳じゃない。
聞かないと。
僕は彼氏なんだ。
何があったか、聞く必要がある。

「花火ちゃん？」
「うん？」
「その姿はどうしたの？」
「これ？　タオルある？」
「うん。あるよ。絆創膏とか必要？」
「大丈夫。タオルで良いよ」

意味が分からないけど、タオルを渡した。
すると、花火ちゃんはタオルで傷口を拭う。
見ているだけでも痛そうだったが……。

「あれ？」

消えた。
どういうこと？

「これ。ぼでぃーぺいんとだよ。ざっゾンビバージョン」

あ～だからボロボロに。
って、紛らわしいよ花火ちゃん。

「どうして、そんなこと？」
「最近、力が出ないんだよ。人をぶっ飛ばせない。コンクリートを粉砕出来ない。傷の治癒が遅い。だから、敵に遭遇したら、すぐに

殺されるから、いつも瀕死を装っているんだよ」
「そうなんだ」
「そうなんだよ。意外にも虫の息の人間を殺そうと思う輩はいないみたいだよ。で、所で大地くんの左目も何かの予防策？」

来た～！！！
違う。
これは違うんだ。
どう説明しよう？
あ～分からない。

「あ～海賊ブームだから海賊ファッションだよ」
「そうなんだ。そうだ。明日、一緒に学校に行こう」
「え！？」

まだ学校には行きたくない。
心の闇が拭えていない。
でもそんなこと、言えない。
僕は首を縦に振るしかなかった。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第二十八話　歩き始める

朝、目覚めて今日の事を考える。
すると、左目が疼く。

嫌だ。
学校に行きたくない。
花火ちゃんが一緒でもそれは変わらない。

恐怖なんだ。
左目を失った恐怖が僕を押し潰す。
何度、起きようとしても駄目だ。

ごめん。
花火ちゃん。
許して。

「お兄ちゃん……」
「え？　陸？」

気付くと妹の陸が僕を見下ろしていた。

「どうして僕の部屋に？」
「だって、苦しそうに泣いてるから心配で……」

苦しそう？
僕には陸の顔の方が苦しそうに見える。
そうか。
僕は妹にこんな顔をさせているんだな僕。

陸も学校に行きたいんだ。
弱さってのは周囲を巻き込む。
ぐちゃぐちゃに弱ろうが、腐ろうが、手を差し伸べてくれる人が居る限り、周囲を巻き込む。
弱い奴は周囲にも迷惑を及ぼす。
結局、弱いから悪いんだろう。

「お兄ちゃん？」
「……行こう。陸。少しづつ行こう」
「うん」

僕は制服に着替える。
久々の制服だ。

「見てお兄ちゃん」

陸も久々の制服だ。

「似合ってるよ」
「本当？　ってかテレるぅ」
「確かに。でも……」

僕は陸の頭に手を置いた。
陸は疑問符を浮かべ、首を傾げ、そして笑った。

「な～に？　お兄ちゃん？」
「いや、ありがとうな陸！」
「嫌だな。言わないでそんな事。陸はお兄ちゃんのこと、好きなん

だからね」
「僕も陸のこと、妹として好きだよ」
「あ〜、最低〜〜」
「え？」
「もう行こう」
「え？　うん」

何故か、陸はプンプンしていた。
そして、僕らは家を後にした。
また歩き始めるために。

……To Be Continued.

第二十九話　長い間

陸と二人で歩く。

兄妹という関係は近いようで、遠い。

僕は慣れない眼帯でもう既に酔っているのに、陸と来たら、もう遠くの方で友達と合流してキャーキャー騒いでいる。

なんだかなぁ～

置いて行かれたのに、心は爽やかだ。

でも、問題は山のようにある。

さてさて、僕の友達は学校にもう居るだろう。

僕を見て、反応はどんな感じだ？

僕は変わった。

おそろしく。

何年も寝かしていたカレーのように変わった。

包帯ちゃんもとい鎧ちゃんに貰った眼帯。

これだけで、フック船長になった気分だ。

裏切りモノは虐殺するそんな気概も生まれる。

.....To Be Continued.

第三十話　孤独の戦争

陸と別れて、孤独が僕を襲っていた。
妹の前だから強がっていた。
勇気が欲しい。

僕は空を仰いだ。

遠い。

果てしなくて遠い空。
その先の宇宙。

僕はなんてちっぽけなんだろうか？

行こう。
宇宙規模で考えれば、僕に起こった事なんて、些細な事なんだ。
気にしたら、負け。
気にすると、敗者。
気に留めると、キリが無い。

さぁ行こう。

「大地！」

歩み始めた瞬間、僕は名前を呼ばれた。
久々に名前を呼ばれたので、何か照れる。

「タヌさん！」

こちらも久々な気がする。
もう一年前のようなそんな感じだ。

相変わらず、ヤンキーのような風貌だ。

頭に鉢巻。
剃り込み。
腹巻。

もう相当前で、どんな格好をしていたかも覚えていないが前に会った時もそんな感じだった。

たぶんだが。

「久しぶりじゃねぇか！」
「タヌさんも久々です退院したんですね？」
「もちろんよ！あんな怪我、うるう年よ」

どういう事だろうか？
４年に一度、直る？
４年間掛かる？

う～ん、わからない。
ここはスルーだな。

「それより……」
「虹か？」
「はい。虹です」

「もう関わるな」
「え？」
意外な言葉だった。
「大地、その左目は虹の仕業か？」
「……」
はっきり言えない。
虹は関係ないけど、言いづらい。
「そうか。はやり虹か」
タヌさんは勝手に納得した。
これで良いのかは分からないが、話は進んだ。
「これ以上は本当に不味い。虹は単独犯。そう言っただろ？」
「はい」
「けど、分かったことがある」
「何ですか？」
「集団催眠って分かるか？」
「催眠？」
「集団だ」
「……はぁ」
曖昧に返事をそうする。
催眠って何だろ？
そんな非科学的な事は僕は信じない。
だから生返事しか出来なかった。

「いいか？　虹は単独犯だが、仲間は無限に居る。そう思え。そして何処にでも居る」
「どういう事ですか？」
「マイルドコントロール」
「？」
マインドか？
「そのマイルドコントロールをされた人間が襲ってくるんだ」
何か、優しげな人が襲うイメージしか浮かばないぞ？
「つまり、虹は単独犯で催眠術を使い、他人を使い僕らを襲うという事ですか？」
「要約するとそうなるな」
勝ち目が無い。
そういう事か。
「あと、最近、ねぇさんに覇気が無くなったぞ？　大地！　おめぇなんか知らねぇか？」
また覇気か。
花火ちゃんだったら、覇王色の素質はあるんだろうけど、タヌさんはそれが見える人なのか？
「よくわかりませんが、最近、元気が無いというか、力が出ないみたいです。こないだも拳が粉砕して、再起不能になりましたよ」
「もう虹が接触してるみてぇだ」
「本当ですか？」

「疑う余地はねぇ。だから、もう関わるな。俺もおめぇも戦うタイプじゃねぇ。ねぇさんの力が無い今、虹と戦争はもう無理だ」

戦争。
そうだ。
僕は花火ちゃんの仇が取りたかった。けど駄目だった。
それが現実。
小説のように。
漫画のように。
アニメのように。
ドラマのように。
映画のように。

僕は生きれない。
運命は決まっている。

そうなんだろ？神様。

僕はもう一度、空を仰いだ。

……To Be Continued.

第三十一話　刀

僕はフラフラと学校を目指した。
大儀を失った戦士だった。
でも力が無い僕はやはり花火ちゃんに頼っていた事を突き付けられた。
復讐？
駄目だ。
僕には無理だ。
やけくその気分だった。
学校は目の前だからって事もある。
「あっ！」
僕は校門の所に立っている彼女を発見した。
花火ちゃんだ。
久々の花火ちゃんは……。
ゾンビバージョンだった。
「大地くん」
「花火ちゃん」

久々の再開って感じだ。
昨日、会ったのに、変な感じだった。もう一年以上、会っていない感じだ。

「まだ海賊なの？」
「あっ……そうだよ」

急いで誤魔化す。

左目が潰れているのを悟らせる訳にはいかない。

「そうなんだ。私も手伝うよ？」
「え？　何を？」
「ワン〇ースを探すんでしょ？　私は刀、口に咥えれるかなぁ？」

必死に口を開けている。
ってか何でゾロの位置に付こうとするんだろうか？
航海士でも手がいっぱい出る奴でも良い筈なのに？

「まだ探さないよ。二年間、修行しないと駄目だから」

ここは乗る事にする。

「二年間～長いね」
「そう長いよ」
「何もしんかったら、行くの止めようってなるね」
「たぶんね」
「ニートコースだね」
「そうそうネット廃人になるだろうね日本だったら」

「そのまま生活保護を受けて、一生、クソみたいにアホみたいに暮らしそうだね」
「……」
段々、リアルになっていく。
漫画の話をしていたんじゃないのか？
「あ～でも」
「ストップ、ストップ」
「探すの？　大秘宝諦めるの？」
「うん。普通に生きよう？」
「わかった。あの刀、捨てちゃおう」
「刀あるの？」
「うん。買ったの。百五十万円したけど」
「ええええええええええ」
僕は叫んでしまった。
花火ちゃんは嘘を言わない。
だからこれも本当なんだろう。
「だって弱くなったから、自分を守るために買ったんだよ」
「意外にお金持ちなの？」
「え？　お金無いよ？　借金だよ」
「どういう事？」
「う～ん。弱くなって不安になって、紹介して貰ったの鍛冶屋を」
「刀はどこに？」
「家だよ？　どうしたの？」
新手の詐欺かと思ったけど、モノがあるから違うのかもしれない。

「誰の紹介？」
「虹さんだよ」

虹。
単独犯。

僕はどうすれば？

……To Be Continued.

第三十二話　サボり

その日、僕らは学校をサボった。

街に出るのは危険だった。

花火ちゃんには敵が多し、今は弱い花火ちゃんだ。

喧嘩には勝てない。

ボロボロになるのは目に見えている。

だから、僕らは土管が2つあり、その上にもう1つ土管が中心にある空き地に来た。

僕はこの空き地のことは知らないが、花火ちゃんは小さい頃、遊んでいたらしい。

そして、僕は土管の上で空を見ていた。

花火ちゃんの待たされているのだ。

どうやら、花火ちゃんの家がこの近くらしく、刀を持ってくると言う事を聞かなかった。

どうしょう？

何気なく左目の眼帯を触る。

少し押すと痛い。

まだ完全に完治はしていないみたいだ。

「大地くん！」

刀を持つ、ゾンビバージョンの花火ちゃんが空き地に入ってくる。
完全に銃刀法違反だ。
漆塗りの鞘が素人の僕でも偽物ではないと分かった。

「すごいでしょ？」
「うん。本物だね」
「名前は大火空」
「ダイビソラ？」
「そうだよ。大地くんの大に私の花火の火、それに空はあれね」
指は空を指している。

「自分で決めたの？」
「そうだよ？　自分の刀の名前を知らないと本当の力が使えないの」
どこのざんぱくとうだ！？
中々、ツッコミが難しいことをいう花火ちゃんだ。

「そういえば、どうしてその刀を？」
「敵に遭遇した場合を考えないと……ね」
敵？
その言葉はリアルで聞くと、軽い感じに聞こえる。
漫画やアニメではない。
本当の敵。
言葉にすれば、本当に軽い。吹いたら消えそうだ。触れば、崩れそうだ。

僕たちは何故そうなったんだろう？

「大地くん？」

「ん？」

「ううん。そうだ、ここの空き地の話をして上げるよ」

花火ちゃんは空き地の事を話してくれた。

ここの空き地はガキ大将と金持ちのガキと、冴えないメガネ、潔癖症の女の子と、青いヌイグルミを着た何者かが良くこの空き地を占領していたらしい。

なんでもガキ大将は歌が好きで、よくこの空き地で歌っていた。けど、残念な事に音痴。

音痴で人が死ぬ訳がないが、病院に担ぎ込まれた人は思いのほか、多かったらしい。

「でね、タイマンで戦ったの」

「そのガキ大将と？」

「うん。身体大きいから、少し怖かったけど」

「で、どうなったの？」

「なんかね。上半身と下半身がちぎれた」

いやいやいや。

それはえげつないだけの話。

「でもね。青いヌイグルミがね、お腹から変な機械を出して、助けてくれたよ？　なんだっけ？　風呂敷みたいな布を掛けたら、元通りになった」

「なんかドラ〇もんみたいな話だね」

「違うよ。ドラ〇もんは私も知ってるもん」

怒る花火ちゃん。
聞く感じまるまるタイム風呂敷なんですけど。

「大地くん、彼らを探さない？」
「なんで？」
「私、力を取り戻したいんだ」

決意の目だった。
僕は頷く事しか出来ない、許さない目だった。

……To Be Continued.

第三十三話　空想話の人物

僕たちは街を歩く事にした。
花火ちゃんのいう力を取り戻すという意味はまだ明確には分からないけど、
進むしかないと思った。

虹が僕らに何かをしようとしている。

いや、明らかに僕らを潰す気だ。

何か手を打たないといけない。
ここで仲間を作るっていうのは間違いではない。

「大地くん、彼らどこに居るんだろう？」
「う～ん」

頭を悩ます問題だ。

僕の知っているドラ〇もんは大概、あの土管の空き地。もしくは、あのノビノビした子の家に居るイメージだ。
小学生という事だから、今の時間帯は小学校に居るかもしれない。

「大地くん！」

いきなり花火ちゃんが叫んだ。
指を指し、その先にはどら焼き屋があった。

いやいや、都合が良過ぎですよ。

まぁ、どら焼きが大好きっていうプロフィールに載っているから、案外、アニメとかで青い奴が持っているどら焼きはこういうところで買われているような気配はある。

「買っておびき出そう！」

「そんな猫みたいな……」

と、言ってから猫型ロボットだと、思い出す。

そして、何故か青い猫型ロボット捕獲作戦が始まった。

まったくやれやれだぜ！

……To Be Continued.

第三十四話　ドラマがあり、ドロドロがあるどら焼き

どら焼き屋でどら焼きを数個、購入した。
老舗という事もあり、どら焼きの種類は餡子だけだった。
今はコンビニなどで売られているどら焼きの具はカスタード、バニラ、チョコレートと種類も豊富なのに、ここは頑なに餡子だけと決めているらしい。

「どら焼きはドラマがあり、ドロドロある、それがどら焼きなのですよ」

亭主のドラさんがそう言う。
ドラさんというのは、あだ名だった。
胸の所に名札があり「ドラ」と書かれ「主食はどら焼きです」と名前の下に書かれていた。

ってか、ドラさんの言っている意味はまったく理解が出来ない。
どういう事だろうか？

ドラマがあり、ドロドロがある？

「大地くん！　これおいしいよ！」

花火ちゃんがどら焼きを食べている。
幸せそうに口、いっぱいに入れ込んでいる。
その姿は誰が見てもおいしそうで、一瞬で僕も食べたくなった。

「僕もひとつ欲しい」
「……あげない」

花火ちゃんはボソッと言う。
しかもめっちゃ睨んでいる。

いやいや、待って待って！
完全に攻撃態勢を作ってるし。
僕は敵じゃない。
味方だよ花火ちゃん。

「上げないもん」
「いや、一つくらい」
「上げない、絶対に上げないもん」

完全な拒否だった。
ここまで拒否されたのは初めてだ。

僕は彼氏なのに。

ここは彼氏の意地を維持しないといけないみたいだ。
花火ちゃんは力が弱くなっている。
僕でもねじ伏せるのは簡単な筈だ。

「花火ちゃん！」

怒ってもいないのに名前を呼び、威嚇して花火ちゃんに突進する。
けど、花火ちゃんは怯まず、拳を握り、真っ直ぐに僕の心臓に拳を突き付けた。

この技は相手の力だけを最大限に利用する技と花火ちゃんに聞いた事がある。

例えるなら、僕はコンクリートに自ら心臓を当てに行ったみたいな事になるらしい。
つまり。

「グェ」

ハートブレイクだ。
僕は心臓を押さえ、蹲る。

「大地くん。力が無くても、技術でカバーだよ」

笑う花火ちゃん、とっても可愛い。

と思いつつ、意識を自ら切り、気絶した。
弱過ぎる僕でした。

.....To Be Continued.

第三十五話　作戦会議

「大地くん、本当にごめん」

花火ちゃんがぺこぺこと頭を下げる。
僕は「大丈夫、大丈夫」と笑って見せた。
実際はまだ心臓が痛くて痛くて堪らない。
発狂しそうな気分だ。

ドラさんが言っていた意味がやっと理解出来た。

どら焼きを巡って、争いがある。
つまりこれがドラマ。
んで、その理由がどら焼きという事もあり、食い意地の争い。

確かにドロドロしている。

でも結局、僕はどら焼きを貰えなかった。
いや、貰える筈も無く、どら焼きは残り一つになってしまった。

「これで、来るのかな？」
「わからないけど」

不安だらけだった。
土管の上にどら焼きを一つだけ、置く。
もちろん、食べ物だから下に紙を敷いた。

「でも、来たらどうするの？」

「わからないよ。とりあえず、仲間になってて言おうよ！」

軽いノリだ。

「もしくはこのどら焼きと貴様の命が欲しければ、仲間になれってのはどうかなぁ？」

重いノリだ。

激しく反対したい。

「大地くん、もしね？　私に力が戻ったら、どうすれば良い？」

「虹を倒す？」

疑問符を付けて言う。

実際、分からないのだ。

力を取り戻しても、何をすれば良いのかわからない。

「虹さんは関係ないよ」

笑う花火ちゃん。

関係ない。

花火ちゃんはそういうけれど……。

違うんだ。

違うんだよ花火ちゃん。

虹は単独犯で集団催眠を使って、僕ら攻撃している。

花火ちゃんの力が無くなったのも虹の所為なんだ。

僕は言うか言わないか、悩んでいた。

この現状は虹の所為なんだ。

でも。
でも。
でも。

言えない。
こんな信じて止まない花火ちゃんに「虹が親玉なんだ」って言える筈も無い。

それにこれからなんだ。
たぶん、虹の攻撃はこれから始まる。

友達、家族、周囲の全ての者が敵になり、下手をすれば、僕も敵になってしまう。

そうなれば、花火ちゃんは一人だ。
そんな事は僕が許さない。

けれど、力が無い。

戦えない。
やりづらい。

どうすれば？

真っ向から来る敵だったら、戦えるんだ。
倒せるんだ。

「そういえば、敵に月島さんっていうのが、居たね」
「え？　え？」
それは花火ちゃんの敵じゃなくて、あのイチゴくんの敵だし、僕らの世界観を壊すけど……。
「月島さんって、人の記憶の間に自分を挟み込むんだよ？　凄いよね」
「あ～うん」
「虹さんもそれに似た力があるんだよ」
あ～そういう事を言うと、完全にパクりみたいにならないかなぁ？
ってか花火ちゃん、知ってるの？
虹の力。
「でも、虹さんは自分の力で人は変わっていくって、良い方も悪い方も、けどね。それは虹さんが意図していないの」
「どういう事？」
「私も分からないよ。言葉には力があるんだって、たったあれだけの言葉で人が変わってしまう、変えてしまう。虹さんは自分の言葉に影響力がありすぎて嫌なんだって」
つもり、敵がいないんじゃあ。
「だからね。私は虹さんの言葉では変わらないって言ったら、虹さんが笑って怒った」
笑って怒った？
どんな感じなんだ？
笑いながら怒るおじさんみたいな？

「で、私、力が無くなったの。ほら、変わるって。笑われたよ」
悲しそうに花火ちゃんはそう言った。
「変でしょ？　それでも虹さんの言葉で変わりたくなかったの。だから、私……」
花火ちゃんは自分の右手を見た。
先日、鎧さんにストレートパンチをして粉砕した右手だ。
再起不能でお箸も持てない。
そこまでする必要があるんだろうか？
赤の他人の悩みまでかぶる必要が。
でもそれは僕も一緒だ。
僕と花火ちゃんは赤の他人。
けど、僕たちは恋人同士だから、花火ちゃんの意思は僕の意思だ。
そう意思なんだ。
……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

第三十六話　嫌な奴

僕らの予想に反して、意外な人物が来た。

金持ちで嫌味な奴。
強い奴には弱く、弱い奴には強い。

すぐに「ママ～」と泣き付く。

奴だ。

と、言ってもそれはアニメや漫画の世界の話。
そんな奴が実際に存在なんてしない。
居る筈も無い。

けど。
けど。
けど～。

あいつだ！

言いたくなる外見なんだ。

頭がリーゼントでも無いのに尖がっている。しかもどの確度から見ても尖がっている。
同様に唇も尖がっている。

あいつを想起する以外に道は無かった。

どうする？
どうする？

悩んだ挙句、花火ちゃんが声を掛けた。

「ねぇ？」
「なんだよおまえ？」

いきなりだ。
花火ちゃんは優しかったぞ？
それを「なんだよおまえ？」だと？
有り得ない。
金持ちだから？
ス〇オだから？

いやいや、いい加減にアニメ脳から離れよう。
あれは違う。
違うんだ。

「私は花火。あなたは？」
「俺はスオだ」

スオ！？
名前、めっちゃ似てるし。

「スオくんね。私の事は忘れた？」

名前を尋ねておいて、それっすか？　花火ちゃん。

「ん？　しらなねぇ～あ～おまえは！？」

「分かった」
「ジャイを倒した女だ」
「あたり」
「ジャイもシズもノーもモンもあんたの事は怖がってるよ。もちろん俺もだけど・・・・・・・・」

いやいや、誰が誰なのか分からないし。
大体、予想は付くけど。

「それはいいの。君たち虹は知ってる？」
「虹？　そんなの知ってらぁ！　俺これでも２６歳だぞ」

ええぇ～～～。

２６歳かよ～！！

衝撃的だった。

……Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第三十七話　二人目

スネ君の２６歳発言に僕はびっくりしてしまった。
外見は明らかに小学生。
半そで、半ズボン、白い靴下、運動靴。
どれをとっても小学生だ。

でも……顔を凝視すれば、年齢が分かる。
小じわに、白髪も混じっている。
仄かに加齢臭も……いやこれは彼の匂いという奴だろう。
なんというか、おっさんに近い体臭の持ち主だ。

いや、それよりも２６歳発言よりも虹を知っているという所が問題だ。
下手をすれば、彼も敵の可能性がある。

ってか、僕は何故か、土管の陰から出るタイミングを見逃している事を忘れそうだから、自己認識しよう。

「スネくん？　ジャイはどこに居るの？」

年上と分かっていても、タメ口の花火ちゃん。
なんとも素敵だ。
キスをしたい。

「ジャイ。あ～」

何とも、バツの悪そうな顔をしている。
たぶんだけど、スネ君はジャイ君の事が嫌いと思う。

僕の知るドラ〇もんでは、いつもオモチャを盗られて、破壊されているイメージしか無い。
普通で考えれば、友達を止めるレベルだ。
もしくは、ジャイを少年院にぶち込むレベルだろう。

「ねぇ？　ジャイは？？」
「ジャイは今、勉強だって！」

スネ君は叫んだ。
嫌なモノを吐き捨てるように。
何故、そこまで嫌なんだろうか？

「勉強？　ジャイが？」

不思議ですという顔を全面に出す花火ちゃん。
頭の中では、ジャイ君は勉強をしないモノと考えているに違いない。
そんな事より、何故、スネ君は苦しそうなんだ？
分からない事だらけになって来た。
迷路に飛び込んだみたいだ。

「あ！　スネさん」

空き地の入り口でセクシーな女性が上品に声を上げる。

まさか？
まさか？
まさかの？

「シズちゃん！」

出たー。
シズちゃんだ。
潔癖症のシズちゃんだ。
しかも、こっちは、めっちゃ大人だ。
スネ君とはまったく違う。
服装もショートパンツにニーハイブーツ。
季節は今、冬なので、ここは季節観を潰すタンクトップを着ている。
色は言わなくてもピンクのタンクトップだ。

ってか胸でけぇ～～～～～。
有り得ない。
外人ですか？
欧米ですか？
シリコンですか？

僕はテンションが無駄に上がっていた。
あのアニメキャラが実写化して、大人になったバージョンがあんなにエロいなんて！？
これは世紀の大発見では！？

「シズちゃん～こいつが煩いんだよ～俺たちを消すような事を言うんだぜ！」

ヒステリックに喚くスネ君。
なんだ？
消すような事って？

花火ちゃんはそんな事を言ったんだろうか？

謎はまだまだ、深まるばかりだ。

……To Be Continued.

第三十八話　三人目の前に

やっとの思いで僕は土管の影から出てくる事が出来た。
多少なりに照れと焦りと、ワクワクと下心と、シズちゃんの胸を凝視したい気持ちを抑制しながら、
事情を話す事にした。
花火ちゃん一人で放置していると、話が進まず、このままノロノロとしてしまい、ここで最終話みたいな最悪なケースにも成りかねない。

それだけは避けよう。
避けなければ。

ある人が言っていた。
小説は人に読まれないと小説ではない。

と、全く関係無いが、そう思うのだ。
虹の事はこのまま、放置して、楽しい生活に戻る事も可能だろう。
けど、チラりと花火ちゃんを見る。

彼女は力を取り戻したい。
そう強く願っている。
僕も左目を失っている。
これはもう取り戻す事は出来ないけど、彼女の力くらいは取り戻した。

「つまり、私たちに協力しろって事よねぇ」

シズちゃんは土管に背を預けながら、タバコを片手にそう言った。

タバコ！！

キャラ破壊・・・・・・・・。

違うんだよなぁ。

リアルにアニメのキャラが居る訳じゃないし。

スネ君が２６歳なら、この人も２６歳だもんなぁ。

ーーーーーあと修正しますーーーーー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3126l/

強過ぎる彼女、弱過ぎる僕。

2011年12月13日08時45分発行